



発行日 2009年8月25日 発行人 細川正善

編集責任者 太田賢孝 編集担当 舘盛寛行 佐藤慧真

発行所 SOTO禪インターナショナル事務局 〒233-0012 神奈川県横浜市港南区上永谷5-1-3 貞昌院内

Tel. 045-843-8852 Fax. 045-843-8864 URL: http://www.soto-zen.net/

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禪インターナショナル

Vol.41



(左)GNCモンゴル代表ナスカ氏・(右)トプシン氏
SZI 植林地にて

CONTENTS

- 巻頭 仏の目、仏のモノサシ……………愛知専門尼僧堂 堂長 青山 俊董 1
- 特集① 両大本山ワークショップ講演録
「宗教とは」～真理は一つ、切り口の違いで争わぬ～(抄録)……………愛知専門尼僧堂 堂長 青山 俊董 2
- 特集② SZI「塔婆供養で植林支援」モンゴル植林ツアー報告……………SZI 事務局長 亀野 哲也 4
モンゴル遊牧民の生活から～近代化と伝統の狭間で～……………SZI 事務局員 佐藤 慧真 6
- 海外レポート ①慶祝！南米別院仏心寺創設五十周年……………元南アメリカ国際布教総監 森山 大行 8
②【婦国報告】ハワイの布教に携わって(2)……………元ハワイ国際布教総監部 吉田 宏得 9
③シンガポール日本寺 開山忌法要に随喜して……………神奈川県西福寺 副住職 西海 裕貴 10
④「グライ・ラマ in アムステルダム」に招待されて～オランダ禅川寺(ゼンリバー)～…静岡県慶昌院 住職 磯田 浩一 11
- 国内レポート ①キャンドルナイト in 大船観音 参加レポート～キャンドルの光に照らされて～…鶴見大学文化財学科・宗教研究部会 12
②孟蘭盆会合同法要報告……………SZI 事務局 13
③平成21年度聖護寺国際公開安居報告……………SZI 事務局員 大谷 有為 14
④夏期大学講座開催報告……………SZI 事務局員 太田 賢孝 14
- 両大本山ワークショップ アンケート報告……………15
- SZI express 会費納入者・賛助金納入者名簿・動静報告・編集後記……………20

巻 頭

仏の目、仏のモノサシ

あお やま しゅん どう
愛知専門尼僧堂 堂長 青山 俊董



夏の夜の思いで話を二つ。

二泊三日の禅の集い、講師控え室でのお茶のひとつ。講師の一人の米沢英雄先生が、うれしそうに話し始められた。

「私の孫はカラッキ運動が駄目で、この間の幼稚園での運動会も、一番ビリを走っていたそうです。孫の前を走っていた友達がころんだら、孫はね、友達が起き上がるのを待って、又ボツボツ走り、めでたくビリッコになった。それを、応援に行った嫁(孫の母)がうれしそうに報告してくれましてね・・・」

と語られる米沢先生も、さもうれしそう。同席していた者も心おどる思いであった。

日本一つまらない一番もあろう。日本一すばらしいビリッコもあろう。勝ち負けでも速さでもない、もっとすばらしいモノサシのあることを、声高らかにうたいあげねば、と思ったことである。

その後の講座は、当時永平寺別院の後堂であられた渡辺月照老師。疲れの見える参加者への思いやりからか、楽しく笑わせながら、しかも滋味深いお話であった。体調をくずし医者から喫煙を禁止されているというお話の中で、「何才から煙草を吸っているのか」と医者に尋ねられ、「ヘイ、三才から吸っています」と答えたという話を老師がされたとたん、私の横にいた若者達の姿勢が変わった。全く聞く気がないような態度でいた若者達が、座り直し、目を輝かせ、身をのり出して聞き始めたのである。坐禅のときも食事のときも、目に余る態度をとり続けていた青年達だ。

その後、若者達は老師を追いかけまわし、別院の住所までもメモして帰った。私はこの姿を見て「ああ、これでこの若者達は生き方を変え、救われる」と思うと同時に、「和光同塵」の言葉が思い浮かんだ。そして、泥に足をつけながら清らかな花を咲かせる蓮華の花を、老師の生き方に重ねつつ、心深く合掌したことであった。

特集① 両大本山ワークショップ講演録

「宗教とは」～真理は一つ、切り口のの違いで争わぬ～(抄録)

講 師：青山俊董あお やましゅんどう老師 (愛知専門尼僧堂堂長、正法寺・無量寺住職)

開催日・会場／6月2日(火) 於大本山總持寺
(一般聴講者有り。なお、開講前に国際布教関係
物故者法要が営まれた)
6月3日(水) 於大本山永平寺 (内講)

本ワークショップの講師、青山俊董老師は講演や執筆などで活躍されており、總持寺会場では一般聴講者の参加を多く得て、用意していた資料が足りなくなるほどの盛況ぶりでした。講演は修行僧向けの内容であり、老師は低い声で鋭い視点から一語ごとに諭すようにしてお話していらっしやいましたが、聴講者は心地よい緊張感の中で最後まで集中して耳を傾けていたようでした。講演後のアンケートに「これまでの内講で一番だった」と言わしめたその全てを紹介することはできませんが、以下永平寺での講演についてまとめさせていただきます。

いま少し いま少し 高く掲げばや 君が掲げし 法のともしび

(少しでも灯火を高くすることで、少しでも多くの方のより広い足元を照らしたいという願い)

かしくみて 伝えまつらん 後の世に 君が掲げし 法のともしび

(2500年に亘り命をかけて伝えられてきた文字では伝わらない尊い教えを、ここで絶やしてはならない、曲げてはいけないという願い)

今日は、師匠から弟子へといかに命をかけて仏法が伝えられてきたのか、若い皆様にお伝えしたいと思ってやって来た。火を掲げ続けることにより、必ずその火をリレーしてくれる人が居る。大勢はいらない。本気の人一人から始めよう。「国は一人の為に興り 先賢は後愚の為に廢る(『正法眼蔵隨聞記』卷2-13)」。お釈迦様の仏法を滅ぼすも興すも自分からなんだということを、明日の仏法を担う若き皆さんにとくと申し上げたい。

宗教は無いところから人間によって作られたものではない

タクシーの運転手にじろりと眺められ「坊主をやっているのですか?」「私は宗教はきらいだ。人間が作ったものに縛られるのは愚かだ」と言われたことがある。「坊主は職業ではない。最高の生き方、最後の落ち着き場所を求めて行き着いた姿がこれである」



青山俊董老師

「宗教は人間が作り出したものではない。ブッダもキリストも天地悠久の真理に気付いただけ。真理は元からあったもの。そうでなければ伝わらなかっただろう」と答えた。

「古」という字は「十」と「口」から出来ているが、十代口伝で相続されたことは間違いがないことだとされる。天地悠久の真理を「古道の発見」といい、それに目覚めた人が「古聖」であり、そ

の教えが「古教」で、その道を慕うのが「慕古」。お釈迦様を目指すのではなく、お釈迦様が目指した真実の道を目指すのである。道元禪師は「稽古」の人といわれる。稽古とは本来、地に頭をたたきつけてでも教えを乞う、求めることである。

地球が出来て46億年。これを一年に換算すると、微生物が生まれてからの命の歴史は30数億年だから4～5月に当たる。人類の歴史は45万年で12月31日の夜10時過ぎに出現したことになり、最も新参者である。さらにその人類が文化を持ったのはわずか数十秒のことになり、三大宗教が生まれたのは、ほんの一瞬前のことになる。先達たちはほんの一瞬前に天地宇宙がこうなっていて、生命はこうなっていて、だからこう生きるべきだとうことに気付いたのである。

こうして、宗教は人間が無いところから作りだしたものではないということをし、しっかりおさえておくべきである。

「仏法—仏教—仏道」の意味

真理とは時と場所を問わず、変わらぬもの。「法」という字は、水が流れ去る様子を表した文字であるが、水は時と場所を問わず高さから低きに流れる。つまり「法」とは時と場所に関わらない真理のこと。お釈迦様が見つけた真理であるから「仏法」。他の人が見つければ名前も変わり、実践の仕方が変わる。名前ややり方などそこを大事だと思っはならない。教えとは天地がどのようになっている、どのように生かされているか知る事であり、これによりいかにあるべきかという生き方が自ずと見えて来る。答えが出て来る。この天地の道理を真ん中に置いておけば、面倒な事にはならない。しかし約束事にのみ目が行くと面倒な事になる。同じ曹洞宗内でさえいろいろな違いがある。両大本山の袈裟の掛け方は違うし、経行にも4～5種類あったりして師家会で盛んに討論したこともあった。これを文字から解決しようとするとな面倒になる。法から学ぶことで解決できるものである。

「参学眼力のおよぶばかりを、見取、会取するなり」

(『正法眼蔵』「現成公案」巻)

還暦の日で作った歌がある。「還暦の峠を越えて 新たなる また旅立ちをするぞ うれしき」。人生に退職はない。最後こそが本番。よしやるぞと二度目の旅立ちをした。これからは老いを見据えて、病を見据えて、死を見据えて人生を深める時期であるぞと思った。さて、ある方がこの還暦の歌に曲をつけ、それが書かれた楽譜をくださった。楽譜を読めない私にはそれがどのようなのか分からなくて何も感じなかったが、知人の声楽家が生演奏してくれて感動した。これは大事なことを示唆している。お釈迦様や道元禪師など、教えをお説きくださった先達を「作曲家」とすると、今生きるための指針を間違いなく生演奏するための手引きが書かれたお経とは「楽譜」である。お経は難しいが、もし一句でもなるほどと思ったら、ぜひ実行(生演奏)に移してもらいたい。

お経といえば、ある講演会で「お経は死んだ人に読むものか、我が足元に向かって読むものか」という質問を受けた。これに答えられなければ、僧侶ではないだろう。私は当然「我が足元に向かって読むもの」と答えた。

私たちは自分の物差しでしか物を見る事が出来ない。だから先達の教えに導かれて少しでも学びを深め目線を高め、物差しを広げ、軌道修正しながらその教えに近づいていきたいものである。自分免許は危ない。そのために読むのがお経というわけである。

人生の交通ルール=天地の道理=仏戒

タクシーの運転手さんに、「戒名とは何か?」「戒名で何で序列があるのか?」と聞かれたことがある。私の答えは次の通りである。「運転ルールに従うから、安全に無事故で運転できるのでしょ? 同じように私という車を運転するための人生の交通ルールが天地の道理であり、仏戒なのです。～したい、～したいというわがままな思いに従って生きれば、人生道の交通事故に遭う。どう自分のたずなを締めるか。踏ん切りが付いた時にいただくのが仏戒。その戒名に当然に序列などはありません。」

命に目覚めた時、誓願を立てていただくのが戒名であり、生きていうちにこれを得るべきである。一休禪師が、葬式でお経をあげずに、亡くなった人の頭を金槌で殴っておいて、「仏法の教えは生きていうちに聞くもんじゃ。痛いといえなくなってからでは遅いのじゃ」と言ったという話もある。最近では葬儀、法要の際に法を説かない僧も多いと聞かすが、それでは駄目。私たちは、相手の聞く耳のあるうち、実践する体のあるうちに、教えを伝える立場にある。

真理は一つ～切り口の違いで争わぬ

コップを横に切れば丸。縦に切れば四角。斜めに切れば楕円形。その全体像を見ることは難しいもの。宗教も切り口の違によって見方が違って来る。しかし発見した人によって同じ真理に違った性格が与えられただけだということを理解すれば、いかなる宗教も手を結ぶことが出来るはず。

切り口しか見る事が出来ない

切り口しか見る事が出来ない、自分の受け皿の大きさしか受け取ることが出来ないという謙虚さが必要。昨日の私を捨てて限りなく気付きを深めなければならない。悟りを振り回さず、法執をも捨てて、ちょっとでも本当の教えに近づかせていただくこと。

切り口の違いは必要あって生まれたもの

全部が見えているという「奢り」が、争いのもとになる。限りなく違いを学ばせていただくという姿勢を持つこと。

例えば、日本ほど自然が柔和で四季の豊かな国は無い。日本語の感性の豊かさは、そのような環境の中で育まれてきた。花が散るといふ表現でも、「梅や桜は散る」「椿は落ちる」「ボタンは崩れる」「萩はこぼれる」「朝顔はしぼむ」などがある。しかし、砂漠ではこのような表現は通用しない。だが、砂の様子を表す表現は非常に沢山あるのである。

質問に答えて、国際布教について語る

愛知専門尼僧堂は年がら年中海外からの修行僧がやって来て、国際色が豊かだ。

欧米には先祖供養の習慣がない。だから経済的に苦しい。苦しいから良い。貧しさに耐えている中に本当の仏法の姿が取り込まれている。ペナージュ大円さんという尼僧もペンシルバニアに帰るとき、「そこで一人の禅僧が坐禅して死んだ。それだけでも種がまけるからいい」といって帰っていった。最初の何ヶ月かはカボチャばかり食べて過ごしたと言っていた…。それでいい。経済的に豊かであるということは、仏法と相反するようだ。



永平寺ワークショップ

「あんしん」と「あんじん」

最初に話したタクシーの運転手は、実は寺の息子であった。念仏を唱えるだけで金が入るということに嫌気がさして寺を出たのだという。彼はむしろ純粋な方であったと思う。「お釈迦様の教えが2500年も相続されているということは、間違いない教えだという証拠だが、あなたはその教えがどのようなものであるか、それ知らずに寺を出た。長い年月には垢もつくものだが、その垢のみを見て反発し寺を出たのは残念なことだった」と言ったところ、「俺も早くそのことを聞いていれば、坊主になっていたかな」と言った。

この垢というところをおさえておいて欲しい。例えば、千手観音は八万四千の煩惱の数、衆生の数だけ姿を現すといわれる。これは方便であるが、ここで止まったら新興宗教と同じ。方便として慈悲を与えるところで止まらず、どうなってもいいというところまで導くこと。例えば、明日手術を控えて不安な人や検査の結果が不安な人に対し、「大丈夫だよ」と言う。その大丈夫が、「ただし、あなたの気まぐれな思いが満足して大丈夫なんじゃないよ。病んでも大丈夫。死んでも大丈夫。仏様の引いてくださったレールから外れる事がないから大丈夫なんだよ」というところまで導けるかどうか。手術がうまくいく、検査の結果が良かったという条件付きの安心(あんしん)ではなく、死んでも仏の手からは外れないからどうなっても良いというところの安心(あんじん)まで導く親切がなければ、それは「垢」である。慈悲の方便門からさらに一歩進んだ範囲までしっかり睨んだ上で引っ張っていく準備が無ければならないと心して欲しい。

濃密な講義に、時間はあっという間に過ぎていきました。帰りがけ、一人の修行僧がエレベーターの前で老師を待っていました。「宗教離れが進む中で、我々は僧侶としてどうあるべきでしょうか?」

老師は、静かに言われました「本気で生死を説きなさい。法話の機会を大事にしなさい」。

P15～19の修行僧の感想も、ぜひご覧ください。

(文責 佐藤慧真)



總持寺紫雲臺拜問

特集② モンゴル植林ツアー報告

SZ I 「塔婆供養で植林支援」 モンゴル植林ツアー報告

SZ I 事務局長 ^{かめ} ^の ^{てつ} ^や 亀野 哲也 (神奈川県貞昌院副住職)

SZ I スタッフ有志によるモンゴルへの植林及び関連施設視察ツアーが6月16～20日にかけて行われました。

このツアーは、「塔婆供養で植林支援」～一本の塔婆で一本の苗木がそだつ～に、全国よりご賛同いただいた苗木（昨年度25,000本分）の植林を実践するものです。

「塔婆供養で植林支援」は、失いかけた森林を元の植生に戻す「共存の森づくりプロジェクト」として、NPO法人GNC（代表・宮木いっぺい氏）およびGNCモンゴル（代表・ナスカ氏）との協働事業と位置づけられています。

これまでの経緯につきましては会報39号に掲載されていますので併せてご参照ください。



ツアーに参加したのは私と菅原研洲、佐藤慧真の3名。首都・ウランバートルから、途中苗木農園を経由して1泊2日の行程で現地に到着しました。

苗木が植樹された地域は、ロシアとの国境付近にあるセレンゲ県トジンナルス地区です。

トジンナルスという言葉は「松に覆われた森」という意味であり、これが示すようにかつては永久凍土地帯に横たわる豊かなアカマツの森林地帯でありました。

しかし近年の建築ラッシュによる不法伐採や、それに伴う1985、89、92、96年と継続的に発生した人為的な森林火災（伐採者の焚火やタバコ、故意の放火など）により一時は地域の約7割の森林が失われてしまい、永久凍土への悪影響、砂漠化の進行など地球環境への影響が懸念されておりました。

国や地方公共団体により植林が実行されていますが、計画的に進んでいない状況にあります。

「共存の森づくり」は、一刻も早く森林再生を行うために、セレンゲ県森林・動物センターとGNCにより行われているプロジェクトです。

「塔婆供養で植林支援」に寄せられた苗木の植樹作業は、5月1日より継続的に行われ、元の植生と同じヨーロッパアカマツ（学名：Pinus sylvestris）が、「2009GNC 共存の森」としてトジンナルス地区シャーマル村周辺10haのエリアに25,000本植樹されました。

作業に当たっては、これまで41年間に亘り森林専門家としてアカマツなど3千万本の植樹を実践してきたセレンゲ県森林・動物センター長・ジャムスレン氏の陣頭指導により、地元の学生、村の住民100人が加わって行われました。

写真のように、まず幾筋にも深く溝を掘り、そこに適切な間



植林地にて（中央）森林・動物センター長・ジャムスレン氏



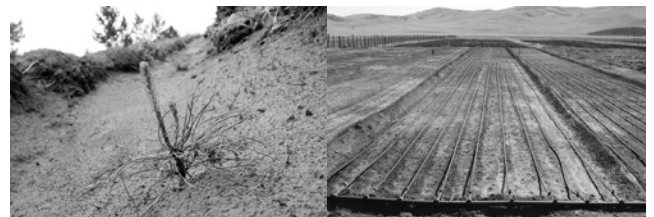
溝を掘り植林する

植林作業



ジャムスレン氏

植林作業を終えて



植林されたアカマツの苗木

苗木育成地

隔で2年生の苗を植えていくという植樹方法が取られています。手間は掛かりますが、風が強く雨量の少ない厳しい気象条件の地では確実に苗木の定着率が向上するという事です。実際に、他の団体が植えた地区において適切な植樹が行われなかったために膨大な量の苗木が全滅している光景を眼にしました。適切な植樹方法や、その後の管理の重要性を示しています。

今回のツアー行程の中で、苗木を種から育てている苗木農場、日本の農業技術を積極的に取り入れているモデル農場、市内の植物園、教育機関などさまざまな拠点も訪問させていただきました。

買ってきた苗を対処療法的に植樹するのではなく、「植林」を中心にそれぞれの活動が有機的に結びついています。そして、それぞれには地球全体を見据えた活動に取り組む「人」がいます。木を植えることも大切ですが、木を育てる人を育てることは更に大切であることを実感しました。

表：ツアーで訪れた主な場所

| | | |
|----------------|---|-------------|
| 第108学校 | 国立の英才教育施設。6歳から17歳までの1,600人が学ぶ。特に環境教育にも力を入れ、GNCモデル農場へのエコロジー体験教育など、様々な活動を行う。 | ウランバートル市内 |
| 音楽舞踊学校 | GNC植物園、公園づくりプロジェクトの一環としての公園づくりが学生とともに行われている。 | ウランバートル市内 |
| エコロジー教育センター | 国立大学付属の植物園。日本からの緑の募金により整備され、小中学校の課外授業、エコ教室などに利用され次世代を育てるばかりでなく、日本とモンゴルの友好の架け橋となる。 | ウランバートル市内 |
| モデル農場 | GNCモンゴル・ツォゴ氏による青森県車力村（現つがる市）の寒冷地農業技術を取り入れたモデル農場。ポプラ並木による防風林、積極的な機械の導入、地下水を利用した灌漑設備、ビニール温室など新しい技術を実践導入。さらに「人を育てる」拠点として長期滞在による実地研修や、環境保護を学ぶエコ教室が行われている。 | ウランバートル郊外 |
| セレンゲ県森林・動物センター | 所長ジャムスレン氏他、20名の職員が勤務。植林作業状況により臨時雇用を行い、雇用創出と環境教育を実践している。 | セレンゲ県トジンナルス |
| 森林動物センター管理苗畑 | 秋にマツボックリから種を採り、2年間育苗し植林する。年間栽培数120万～200万本。 | セレンゲ県 |



モデル農場



第108学校

音楽舞踊学校

旅程の中で、ウランバートル郊外にあるダンバダルジャー日本人慰霊碑を訪問いたしました。ここにはノモンハン事件や戦後抑留され強制労働に従事され再び郷土の土を踏むことなく厳冬の地モンゴルで亡くなられた数多くの日本人が祀られています。

慰霊法要を営みました。



日本人慰霊堂にて

全体を通して信頼関係と相互理解を元に、共に学び、共に成長し、共に歩もうとする人々の姿が印象に残ったツアーでした。

「塔婆供養で植林支援」を実施するに当たって、よくある質問が「なぜモンゴルへの植林なのか」ということです。ツアーを通して、その答えはより明確になりました。

そこに植林を必要とする場所があり、そこに信頼できるパートナーがいるからです。

「人を対等に思うこと、他人を尊敬する姿勢、共に生きようとする気持ちこそ共存の基礎であり、信頼関係の源であると確信している」……これはGNCモンゴル代表のナスカさんの言葉です。地球環境を考えると、そこに国の垣根は無いのです。

「塔婆供養で植林支援」は、S Z I会員（御寺院様や会社、個人など）のご理解により成り立っています。曹洞宗寺院だけに限ってみても、全国にある14,000の寺院、数百万の檀信徒さん、そして関係の方々数は計り知れません。この植林がきっかけとなって、日本国内のそれぞれの場所に植林実践活動のネットワークが広がっていくことにより、きっと大きな力を生み出すことでしょう。



木が育ちますように

数多くの学びと出会い

を与えていただいたツアーは、GNCモンゴルスタッフの皆さまを初め多くの方の協力により無事終了いたしました。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

苗木の育成状況は、S Z I会報やホームページでも報告させていただきます。予定です。

S Z Iの「塔婆供養で植林支援」は継続して行われます。植林支援は宗派によらず参加可能です。苗木本数分×30円の植林支援金をS Z I事務局へ振込んでいただくことにより、事務局よりポスター、植樹証明書、苗木本数分の通し番号付植林支援シールをお届けします。各寺院様にはこのシールを卒塔婆に貼付し供養の施主に渡すなど活用くださればと思います。

郵便振込口座 00100-6-611195

SOTO禅インターナショナル

「塔婆供養で植林支援」と明記ください。

詳細はホームページをご覧ください。S Z I事務局までお問い合わせください。

寄せられた支援は、平成21年6月末で159件、4万6千本を越えました。

特集② モンゴル植林ツアー報告

モンゴルの遊牧民の生活から ～近代化と伝統の狭間で～

S Z I 事務局員 佐藤 慧 真 (新潟県興源寺徒弟)

モンゴルは、1921年の社会主義革命・建国以来、長年に渡り旧ソ連の影響下にありました。しかし、旧ソ連の崩壊後民主化運動が進み、1992年には国名をモンゴル人民共和国からモンゴル国へと改称して、民主国家への道を歩むこととなりました。以降、市場経済への移行が急激に実施されたわけですが、政治的な混乱も顕在しており、2008年の選挙時に大規模暴動が起こったのは記憶に新しいところです。

今回、私たちはGNCの現地スタッフの案内の下、さまざまな施設を訪れ、沢山のの人々にお会いする機会を得ました。インターネットカフェやカラオケ店が立ち並ぶウランバートルからロシア国境方面へと北上する旅の途中では、伝統的な遊牧民の生活にふれることも出来ました。これらの貴重な旅の経験は、私たちに「豊かさ」とは何なのかを再考させるものともなったのであります。

心地良い「ゲル」でのおもてなし

ウランバートルから植林地であるトジンナルスを往復する間、遊牧民のゲルで2回休ませていただきました。「ゲル」というのは、木とフェルトで作る組み立て式の円形住居のことです。ちなみに、中国では同じものを「パオ」といいます。彼らは、夏場は水場に近い場所、冬場は防寒に適した山間部など、季節によってゲルを移動しているのです。ゲル内部の広さは、畳でいうと8～10畳くらいでしょうか。その中に家族4～5人で住み、男性は早朝から羊・牛・馬・山羊・ラクダ（その家によって異なる）などの放牧に出掛け、女性は乳搾りや家の中のことをして働きます。

私たちが訪れたのは、GNCモンゴルの苗木農場の側にあるゲルです。訪問にあたり私が予習していたのは、入って左側は男性のエリア、右側が女性のエリア、真ん中の柱の間を歩いてはいけないということだけでした。さて、楽しみにしていたこのゲルの中に実際に入っての最初の印象は、「これだけの家財で家族全員が暮らしているのか？」ということでした。入り口は南向き。入って正面に仏壇があり、ダライ・ラマや家族の写真などが飾ってあります。真ん中のストーブを囲んで、左側にベッドが一つ。右側にも一つ。それを挟んでチェストがいくつかがぐるりと壁に沿わせて置いてあり、ス



ゲルの横に、ソーラーパネルが見えます



ゲル内部。右側が女性の、左側が男性の場所とのこと

トープの向こう側にテーブルが置いてあります。私たちが普段、家の中の膨大なスペースを使って保管している荷物を思うと、4～5人で暮らすための生活雑貨としては極端に少ない量です。というか、私たちの、あの荷物っていったい何なのでしょう？

突然やってきた私たちのために、奥さんがストーブに火を入れて、お茶の用意を始めました。

「スーティ・ツァイ」。乳茶です。

大きな鉄鍋にお茶の葉とお乳を豪快に入れて沸かします。ストーブの燃料は、薪や動物の糞。床下のカーペットの下にも動物の糞を敷くのだそうですが、何の臭いもしません。ゲルの中は快適で、落ち着いた雰囲気です。

お茶の用意が出来るまで、手作りのドーナツのようなちょっと硬い揚げ菓子、それにつけるウルムというあっさりしたバターがふるまわれました。奥さんは愛想を振りまいてはいませんが、せつせとした動きの中にめいっばいのおもてなしの心が感じられます。

たっぷりお茶が注がれたカフェオレカップのような器を受け取り、それを両手で包み込んで一口含めると、意外とあっさりとした塩味の紅茶でした。美味しい～。

外で牛皮をなめす作業に挑戦し（菅原先生がとても楽しそうでした）、その後、馬に乗ろうと彼方にある動物たちの水飲み場まで馬を探しに行くことになりました。

草原の水飲み場では、バケツではなく、車のタイヤで作った皮製の袋に縄をつけて、それをボチャンと井戸の中に投げ込み、いちいち手で引き上げて動物たちに水を与える作業が繰り返されていました。何度もなんども皮袋の水を引き上げているお兄さんの、裸の背中が太陽を受けて黒く光っています。ジャバツと放たれた水に、牛たちが必死で顔をつっこんでいます。

大変な作業なので、もしここを通りかかった人が水汲みをしている人を見かけたら、最低一杯分は手伝わないといけないという、遊牧民の礼儀があるそうです。ですので、我々を代表して菅原先生が水汲みすることに・・・(菅原先生、お疲れ様でございました)。



奶茶のおともは、乾燥チーズとプリン

どの子からともなく、水飲み場を去り始めた牛の群れが遠くになると、丘の方から今度は馬たちが水飲み場めがけて一気に駆け下りて来ました。いったい誰が決めているんでしょう。この見事な動物たちのルールを。

広い草原には風が吹き渡っています。まったく自由に吹き渡り少し肌寒いくらいですが、ここには風をよけるためのものが何もありません。どこまでもどこまでも、私を隠す場所がありません。

近代化と伝統の両立が課題

ふと、草原に住むゲルの家族の子どもたちが学校へどうやって通っているのか、疑問に思えました。スクールバスはありそうもなし。まさか馬に乗って通っているのかと。

GNCモンゴルのナスカさんに聞いてみると、「学校の側の寄宿舎に住むのです」とのこと。義務教育は近年開始年齢の引き下げが続いており、2008年から6歳から始まることになったそうです。ということは、モンゴルの遊牧民の子どもたちは6歳になると、はや両親や家族と離れて外の世界に飛び出していかなければならぬというわけです。

「それでも、モンゴルでは家族は一緒に住むべきだという意識は強いですし、家族の絆は強いです」とのこと。家族全員でとびきり密接に過ごすゲルでの数年間、その絆を作るのでしょうか。

なお、最近では教育費の高騰、寄宿舎の有料化、家畜の私有化で働き手の必要性が高まった、などの理由により、学校をやめていく子ども（特に男の子）が増えているようです。近代化による貧富の差が問われているモンゴルにおいて、この貧困化の悪循環は断ち切らねばならない課題の一つであることでしょう。

さて、近代化といえば、草原にポツンと立つゲルの横に、太陽光発電のためのソーラーパネルやパラボラアンテナが設置されているのをよく見掛けました。ソーラーパネルは国から支給されたものですが、しかしこれの寿命は何年も保つものでもなく、壊れたパネルやバッテリーなどが新たなゴミ問題として浮上してきているとのこと。遊牧民をフォローするための国策なのでしょうが、環境対策が後手に回っているようです。

ナスカさんは言っています。

「モンゴルは、伝統的な生活と近代化を両立させて発展していかなければならないといわれています。過酷な生活は少しでも改善していきたい。しかし、伝統が持つ良さを失って

もいけない。大変難しいことですが、この両立は重要です」

過酷な生活を改善し豊かになりながら、しかも環境を保全し精神的にも安定した社会を作ること。難しい問題ですが、確かに今モンゴルは岐路に立っているところなのです。

実は、GNCモンゴルでは、植林活動の他、国内の環境教育や農業研究にも大きなウエイトを置いて取り組んでいます。私たちは、滞在中、環境教育に熱心な「第108学校」（これは仏教的な意味での数字で、校章には法輪がアレンジされていた）、国立音楽舞踊学校、環境教育センターやツォゴさんという方のモデル農場を訪問しています（まさに、弾丸ツアーといえましょう）。中でも、ツォゴさん自身がとても印象的な方でしたので紹介しておきたいと思います。

ツォゴさんはソビエト崩壊後、混乱するモンゴルの農業を立て直すべく、ご自身が農業研修の通訳として滞在した青森県車力村（現つがる市）の協力を得て、ウランバートルから35キロほど郊外でモデル農場を運営しています。技術改良の傍ら、防風林（モンゴルでは風による害をどう食い止めるかが重要）として植樹するためのポプラの苗を育てているそうですが、これは周辺の農家にも無料で配る予定とのこと。また、近代的な農業を知りたいとやって来る人には、「大勢でなくてもいい。ここで学んだことを一つでも実践していつか人間がいたら嬉しい」と、隠すことなくすべてを教えてあげているのだともいいます。どうやら元々機械工学の専門家であったツォゴさんを1999年の農場の立ち上げへと駆り立てたのは、目先の利益などではなかったよう。それはまさしく、自利利他の精神であったといえましょう。

エピソードをもう一つ。この農場には宿泊施設があるのですが、すべて手作りというわりに快適な建物でありました。そこでゆっくり泊まってみたいなあと思い、「いくらで泊まれるんですか？」と聞いたときのこと、ツォゴさんは笑って言いました。

「え、そんなものは要りませんよ。人が来てくれるだけありがたい。いろいろ情報が入手できますからね。良い仲間を作るということは、お金より貴重な投資なのだと私は思っているんですよ」

この旅で、ツォゴさんや、子どもたちに残す未来のためにGNCの活動を始めたというナスカさんなど、一箇半箇でひたすら真っ直ぐ環境問題に取り組む精神に出会えたことは幸いでありました。彼らの活動がモンゴルの近代化と伝統の両立に大きな力となっていくことを確信し、それに学びながら、私たちにまた一切のために何が出来るのか、考え実践していきたいと思っています。

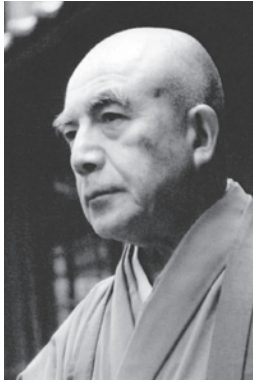


フンガフンガ水を飲んでいる牛たち

… 海外レポート① …

慶祝！ 南米別院仏心寺創設五十周年

元南アメリカ国際布教総監 もり やま だい ぎょう
森 山 大 行 (山梨県瑞岳院住職)



著者近影

著者略歴

1938年 サハリンに生まれる
 1962年 駒澤大学 哲学科卒業
 1970年 桑港寺 (サンフランシスコ) 赴任
 1990年 フランス別院 (セントアグレブ) 設立
 1992年 曹洞宗南米開教総監 (サンパウロ)
 1995年 ウルガイ禅センター (モンテビデオ) 開山
 2000年 ブラジル別院 (ポルトアレグレ) 開山
 2007年 鳥海山国際禅堂 (秋田) 堂監

現在 国際禅交流 日本代表
 大菩薩山僧堂 堂 長



国際禅交流

中南米 (ラテンアメリカ) 総局

Associação Zen Budista
 de Porto Alegre

Rua Prof. Ivo Corseuil, 169
 CEP 90690-410-Porto Alegre-RS
 Tel./Fax: 55 51 3381-5539

天涯の留錫

2008年の12月頃、現総監采川道昭老師からお電話をいただき、「2009年11月14日、15日に禅堂の落慶法要を決定したので列席を・・・」とのお知らせを受け、宙に舞い上がるほどに驚喜いたしました。その驚喜の中には、数えきれない、語りつくせない、感慨が渦巻いているのです。今回はその中の二つをご紹介します、慶賀と鑽仰の言葉といたします。

その一つ。山僧自身、今から16年前の1993年、第三代南米総監として赴任、当時荒廃して崩壊寸前だった伽藍の再建と復興に取り組んだ体験があるのです。右も左もわからず、言葉もままならぬ異国での建立事業。不安に怯えながら、死に物狂いで奮闘した3年間。この世の地獄を味わった思い出があればこそ、今回の落慶には、「お見事です!」、「あっぱれです!」、「よくぞやってくれました!」、と讃嘆せずにはいられないのです。

雲海に行脚

その二つ。復興計画の当初の設計図には、大本堂の奥に禅堂の建設がありました。しかし、諸般の事情で断念せざるをえないこととなり、残念、無念、の思いは強烈で、切実なものでした。つまり、禅堂建立は、山僧にとって悲願だったのです。ブラジル僧侶の育成に最も基本となる僧堂生活、さらに弁道法が実参実究できる道場、が夢であり誓願でありました。日本が世界に誇る禅の精神文化を体現する禅堂の

落慶は、山僧にとって慶福、慶賀の極みでございます。

大展の礼拝

16年前を回想いたしますと、あの復興事業は、数えきれない、語りつくせない、多くの方々の御寄進、御支援、御献身があり、その賜物なのです。あらためて深謝の念が湧き上がるのです。特に、深謝しなければならない四人の奇特の方々がおります。その、どのお一人が欠けてもあの大本堂は完成できませんでした。

大本山永平寺 七十七世 丹羽廉芳 禅師、山僧の親教師であり隨身させていただいたお師家様。当時の大本山永平寺 監院 南澤道人 老師 (現副貫首)、がむしゃらに、向こう見ずに勇み走る山僧を寛大に導いて下された大恩人。イピラスー 禅光寺 堂長 ビッチ大樹師、事業の最前線を開拓した貢献者です。湯河原 吉祥寺 住職 尖秀雄師、山僧の右腕、いや両腕になって陣頭指揮して下された最大の功労者です。

最後に、SZIの皆様のご協力に深謝申し上げます。あらためて大展。

合掌

南米別院仏心寺については『曹洞宗 海外寺院ガイド』P55をご覧ください



ポルトアレグレ禅堂にて弟子門人と



サンパウロ中国寺院にて

… 海外レポート② …

【帰国報告】 ハワイの布教に携わって (2)

元ハワイ国際布教総監部賛事 よし だ こう とく 吉 田 宏 得 (静岡県萬松院住職)

ハワイの寺院の一面を紹介させて頂いた前号に続き、日本から継承された行事がハワイの色に染まると、この様になるといった一面を紹介します。

「婦人会」各寺院の婦人は、お寺の全行事で食事の支度や清掃さらに必要な用具の調達また高齢参拝者への補助等、ありとあらゆる面で不可欠な大きな力を発揮し、布教の補佐と寺院の運営を手伝ってくれます。いわばお寺の大きな縁の下の力持ちです。特に全寺院婦人会の結集した組織 United Hawaii Soto-Shu Women's Association (ハワイ曹洞宗連合婦人会) 通称UHSSWAが、相互の協力を強固にしています。年に一度当番制で、各寺院が持ち回り、仏教の教えを学び会員の親睦を兼ねたUHSSWA Conference (連合婦人会大会) を開催します。当日は会場となる島へ、各寺院会員が半年かけた手作りの手芸品、また数日前に力を結集し調理した味自慢の食品等に地元の名産品を準備し集まります。開会法要と新亡会員供養の後に、誰もが待ちかねたDonation Drive (寄付金相互支援) が行われます。年に1回集う各島個々の自慢の味や名物を、参加者に近隣の住民たちも混じって楽しみながら購入します。その収益金を会の年間運営費や敬老施設への寄付金また子女の奨学金等として活用するのです。ここにもハワイの信徒特有のAloha Spiritsが微笑みと共に溢れています。夕刻の晩餐会では、人種を超えたハワイの著名人を講師に迎え「その方から見た仏教やその役割」等をテーマに、講話を聴いたり討論したりと夜遅くまで続きます。翌日は、朝課の後に新年度役員の就任式と前役員功労式、そして婦人会の新年度の目標に沿った討論会等の有意義な日程が組まれ、それらを無事に終了して翌年も互いが無事に再会できるよう願い「アロハオエ」を合唱して大会を終わります。日本にもこの様な組織を抱え行動している地域や寺院は多くあると思いますが、気さくで和やかに明るく交流し前向きな深い信仰の姿は、ハワイの独特な雰囲気味わわせてくれます。



連合婦人会の1コマ

次に「盆踊り (Bon Dance)」を紹介します。近年の日本ではお寺の行事より地域の納涼行事に変化し、会場も校庭や公園等で行われていると思います。ところがハワイでは、盆ダンスは必ずお寺の境内で行われています。驚くことに、その期間は6月半ばより9月初旬まで約3ヵ月以上も、毎週金・土曜の夕刻7時から10時頃まで、各島の何処かで行われています。各島の各地域で3ヵ月も催される影には、細やかな気遣いがあるのです。それは古くプランテーションの時代、早朝から日没まで酷暑の中で過酷な労働に追われ、何の娯楽も無かった時代。他の地域との交流ができずして太鼓や歌自慢達が披露する盆歌に日本の故郷を懐かしむ機会でした。ですから、出来るだけ大勢に機会を与える為に地域と開催時期が重なり合わない配慮の結果、長い盆ダンス期間となったのです。さらに、ほとんどの会場では盆ダンス前の夕刻に盆法要が行われ、そしてダンスの始まりには、必ず会場寺院僧侶により先祖や愛しい人の御霊を踊りの輪に迎える為の読経が唱えられ参加者全員が手を合わせます。ここに厳粛なる宗教行事としての盆ダンスと地域の交流を兼ね備えた、ハワイの盆ダンスの意義が脈々と引き継がれているのです。年に一度のお客様を各家族そして地域が喜びの輪に迎え、さらに自分達の心の輪も繋げているのです。今では人種を超えたハワイの風物になっています。



日系寺院ならではの Bon Dance 風景



連合婦人会 Donation Drive の1コマ



各寺院の名産品が楽しみな Donation Drive

… 海外レポート③ …

シンガポール日本寺 開山忌法要に随喜して

にし うみ ゆう き
西 海 裕 貴 (神奈川県西福寺副住職)

シンガポール日本寺は、元々はシンガポール政府公園局の管理する日本人墓地公園の中にあつた祠でした。

日本人墓地公園の中には「カラユキさん」といわれる日本人女性の墓や、現地で客死した日本人、大戦の犠牲者などの墓石が900余り並んでいます。

現在ある伽藍は約30年前に福島県・圓通寺住職吉岡棟一老師（当時）と横浜市・西有寺住職横山敏明老師、および西有寺会の発願により、西有穆山禅師を勧請開山として創建されました。

その後日本人会に寄贈され、毎年6月4日を開山忌として1年に1度の法要が続けられています。

本年、師僧である西福寺住職が焼香師としてお声がけをいただき、私はその侍者として法要に随喜しました。この機会に西福寺では檀信徒をお誘いしてシンガポール日本寺参拝旅行を計画し、檀信徒23人と、教区より随流院様、東光寺様、龍珠院様の特別参加をいただき、住職、副住職を合わせて計30人で開山忌に臨みました。

旅程は空路でマレーシアに入り、クアラルンプール、マラッカを観光し、マレー鉄道に乗ってシンガポールに入り、法要に参列するというものでした。シンガポールに入るまでは、この25年間当法要の世話役を勤められた宗議会議員・泉龍寺砂越老師にご同行いただき、砂越老師のゲストとして宗議会議員・妙厳寺横井老師、龍昌院石澤老師ともご一緒させていただきました。

旅程4日目、いよいよ日本寺に参拝し、開山忌法要を迎えました。お堂は思ったよりきれいで、聞くところによると日本人会で雇っている堂守の中国人の家族がすぐ裏に住み、墓地とお堂をいつもきれいにしていて下さるとのことです。当日は現地集合の西有寺横山老師、興禅寺市川老師、清水寺久喜老師も参列され、計11人の僧侶が開山忌法要、施食

会法要の二座が厳肅に勤められました。日本の夏を思わせる、いや、それ以上に高温多湿のシンガポールの気候の中、流れる汗も気にせず、お経を読み、法要を勤めているとなぜか清々しい気分になり、この地で最期を迎えられた方々の思いが遠い日本まで届き、とても喜んで下さっているように感じることができました。参列の檀信徒の皆様からも、海外でこんな厳肅な法要に参列できて、大変貴重な経験をさせていただいた、と好評をいただきました。

なお、来年からは砂越老師に代わって、師僧と東光寺様、龍珠院様が法要の世話役を勤めることとなり、毎年のようにシンガポールに行くことになるそうです。これからは日本寺の開山忌法要が両国の友好と現地日本人会の方々の心の拠り所となれるように、師僧を手伝い、私もまたこの地に赴けるようにしたいと望んでいます。

シンガポール日本寺については『曹洞宗 海外寺院ガイド』P88をご覧ください



シンガポール日本寺本堂



開山忌法要



参列者とともに

… 海外レポート④ …

「ダライ・ラマ in アムステルダム」に招待されて ～オランダ禅川寺（ゼンリバー）～

いそ だ こう いち
磯 田 浩 一（静岡県慶昌院住職）



ダライ・ラマ法王

オランダの総人口はおよそ1,660万人、キリスト教とイスラム教の信者がその半数をしめていますが、現在では仏教がそれらに続く第3番目の宗教ではないかと言われるほど、信者もしくは興味を示す人の数が増えてきています。

2009年6月4日、ダライ・ラマ法王は、「RAIコンベンションセンター・アムステルダム」というホールで講演を行いました。これはオランダのテレビ局「BOS」とオランダの仏教会のような集まりの協力の下、「ダライ・ラマ Netherlands」の主催で行われたものです。

朝9時に始まり夜の7時まで、途中に2回の休憩を挟んだ計3回の講演は、平日の昼間に関わらず沢山の人が集まり1万人の観客席は終始満席でした。

曹洞宗国際布教師アントン・天慶・コペンズ師主宰の「禅川寺」ことゼンリバー (<http://www.zenriver.nl/>) は、ダライ・ラマ事務局よりこの講演会にVIPとして正式に招待され、天慶師のお取り計らいで日本人の私も招待いただく御縁に恵まれました。オランダで仏教僧侶というと多くはチベット仏教のエンジ色の法衣が連想され、黒の直綴に木蘭、又は黒のお袈裟という出立ちは会場の聴衆には馴染みが薄く、「私たちがどのような集団なのかアムステルダムの人たちには分かってもらえないでしょう」という事でした。



天慶師とダライ・ラマ法王

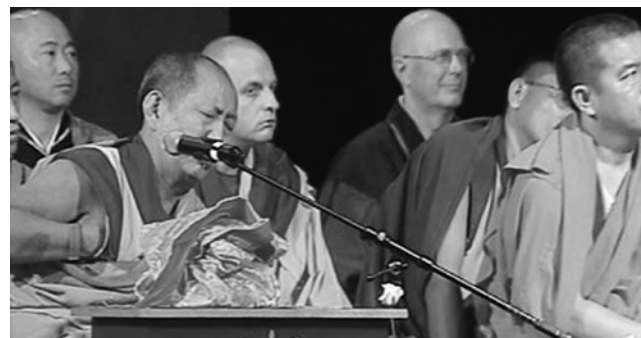
当日招待を受けた我々10名は、30名のチベット僧侶と共にステージ上に搭袈裟で坐禅を組み、法王のそばでお話を聞く事ができました。平日木曜日の朝9時から夜の7時まで、1日がかりの講演会では20代～50代位の比較的若い人たちの顔ぶれが目立ちました。チケットは7,000円くらいから14,000円位までと決して安くはありませんが、ほぼ満席と見られる状況はオランダの人たちのダライ・ラマ法王に対する関心度をあらわしていると思われます。当日の言語も1万人の聴衆全員にヘッドフォンと受信機が貸与され、法王の生のお声の英語のほか、オランダ語、ドイツ語、フランス語、中国語の4ヶ国語の同時通訳を配信するあたりも、講演会の規模の大きさを物語っていました。

人々の生活に密接する、悩みや問題をどう処するかという話はとてもわかりやすく、宗教的な意味合いではない「心の指導者」という雰囲気がオランダの人たちを引き付けている様子でした。

今回ゼンリバーは、ダライ・ラマ事務局から突然招待状を受けたのですが、そこにはゼンリバーの活動がオランダの中で「禅仏教のオーソリティー」であるとの認識からのものであったようです。山主である天慶師は故前角博雄老師の教えの下、2002年に同国に禅道場を開堂以来、①只管打坐と公案の融合による坐禅、②曹洞宗式の法要ならびに行持、③曹洞・臨済を始めとする祖録を用いての提唱・公案、④近隣およびインターネット法話などでの諸地域の人々とのつながり、の四本の柱を中心にその活動を広めています。

曹洞宗の要素を多く含むその活動ですが、ヨーロッパの形に適した独自のものを多く持ち、曹洞・臨済という枠にとられない禅宗としての活動が、これからも世界中に信者を増やしていくものと思われます。日本の既成宗派より派生したそのバイタリティーあふれる活動にこれからも注目していただきたいと思います。

オランダ禅川寺については『曹洞宗 海外寺院ガイド』P87をご覧ください



写真左 著者

… 国内レポート① …

キャンドルナイト in 大船観音 参加レポート

～キャンドルの光に照らされて～

キャンドルナイト。最近の環境意識の高まりの中、この言葉を耳にする機会は多い。さまざまな場所で、それぞれの思いを込めてロウソクに火が灯される。

大船観音においては、その趣旨は明確である。観音様の慈悲の下、世界の平和と人々の安んずることを願うのである。そしてその特徴の第一が、「原爆の残り火」を灯し、あの戦争の悲惨さとそれが今にまで続いている現実に対して思いを新たにしたいと願うことにある。

学生諸君の協力も得て、今回のイベントも無事終了した。学生達は、このキャンドルナイトを通して何を感じたのか、何を思ったのか、一文を寄せてもらったのでこの場を借りて紹介いたします。

* * * * *

6月10日水曜日、私たち鶴見大学文化財学科・宗教研究部会では、大船駅からも見えるあの観音様の坐す大船観音寺でのイベント「キャンドルナイト」に参加しました。

去年は、「キャンドルナイト」と「ゆめ観音アジアフェスティバル」にボランティアスタッフとして参加したのです。その「ゆめ観音アジアフェスティバル」は、長年の活動が認められ、第33回正力松太郎賞という素晴らしい賞を受賞したそうです。

さて、去年の「キャンドルナイト」は雨の中での活動で大変でしたが、今年は晴れました！ 昨年にも増して大勢の参加者を得てイベントは盛り上がりました。参加費は無料、誰でも参加できるのです。

イベントの中心は、境内にある「原爆の火の塔」に灯る原爆の火をめぐり、キャンドルに移し観音様にお供えするというものでした。

キャンドルには、参加者お一人お一人のメッセージや願い事が添えられました。

あの悲惨な原爆の火が今に途絶えることなく引き継がれ、私たちに平和の尊さを伝えてくれています。

1945年8月6日以来、一度として絶えることなく燃え続け

ている火、広島に投下された人類史上初めての原子爆弾の火、すなわち、世界で唯一の「火」ということです。

この火が守られてきた経緯は、既に御存知だと思いますが、その火がひょんなことから人の知るところとなり、今日に受けつがれてきたのです。

境内にある「原爆の火の塔」に灯る原爆の火は、星野村役場前に建立された「平和の塔」に灯る原爆の残り火から分火されたものだそうです。私たち平和を願う者たちの宝です。いつまでも守っていかなければならないものだとつくづく考えさせられました。

キャンドルを並べ、ライトダウン。観音様の下で沢山の人の願いが込められたロウソクの小さな炎が広がる光景は、とても幻想的で感動的でした。キャンドルでハートを形作るなど、様々な趣向を凝らす人々もいましたが、思いは一つ。争いのない、誰もが穏やかな気持ちで過ごせる平和な世界の実現。私たち一人ひとりの幸せも平和があってこそなのです。

他大学のボランティアの方々もいらして、キャンドルナイトというイベントを通して触れ合い、互いを思いやる、優しい気持ちの尊さを考えました。そして、こうして平和を願うイベントに参加する人が沢山のことを嬉しく思いました。

とても貴重な経験をすることができました。来年もまた参加したいと思っています。

(鶴見大学文化財学科・宗教研究部会)

* * * * *

ロウソクの光は、人々の心を和ませる。その炎の源が原爆の火であったとしても。逆に、そのような光であることを知っているが故に、その思いも強くなるのであろう。

学生には、このような場を通して多くの方々と共に平和を願い、様々な体験を聴き、自身を高めていってもらえることを切に願っている。

(曹洞宗総合研究センター客員研究員・鶴見大学非常勤講師 尾崎正善)



… 国内レポート② …

孟蘭盆会合同法要報告

7月19日 東京グランドホテル（曹洞宗檀信徒会館）研修道場を会場に、孟蘭盆会合同法要が開催されました。

ゆめ観音アジアフェスティバルにおける「平和の火」から繋がる縁により、元国際布教師であるSZI会員・大場満洋老師が主催され、SZIは後援という形でサポートさせていただきました。

合同法要は午前中の第一部、午後の第二部の構成として行われました。

■ 第一部 孟蘭盆会合同法要

法要は曹洞宗のみならず、真言宗、浄土真宗をはじめ各宗派の御随喜のもと営まれました。

研修道場の本尊様の周りには参列された方々に縁のある故人の遺影とともに、新疆、西藏で亡くなられた僧侶の供養塔婆も掲げられました。

庭には施食幡が並べられ、庭を背景に精霊棚が設置されています。



法要の後、昼食を挟んで、カウンターテナー歌手の池田弦氏、フルート、電子ピアノによる演奏、そして人形芝居など檀家さんや縁の方々による清興がありました。

■ 第二部 平和の祈り、「GATE」映画上映

インドのタンブーラ演奏家のニーティヤンダ・藤堂氏によるサンスクリットの般若心経の後、各言語により世界平和を捧げる平和の法要が営まれました。

特に最近チベットや新疆ウイグル地区の紛争が記憶に新しいところです。

不条理な迫害による宗教、民族弾圧が世界各地で行われていることへの抗議の気持ちが込められています。



その後、平和を願い、平和を考える素材として、僧侶が広島原爆の残り火を原爆の誕生したアメリカの核実験場へ運ぶドキュメンタリー映画「GATE」が上映されました。

平和を求めるところはどの民族でも共通であるはずですが、その平和は、私たちの行動、態度、日常の行為を通してのみ達成できます。平和の文化はすべての人が分かち合う、普遍的な文化であり、人間性に不可欠なものであることを認識し、私たちはそれを実践に移していくことが必要なのだろうと思います。

ご先祖様と共に祈りを捧げ、ともに楽しみ、そして世界全体の平和を願う祈り、そして禅僧たちが行った平和の行脚を元に、この機に改めて平和について考え、一人ひとりがどのような平和の行動に移すことができるかを考える、その契機となる一日であったと思います。

願わくは この功德を以て普く一切に及ぼし

我等と衆生と皆共に 仏道を成ぜんことを

○普回向

| | |
|--|-------------------------------|
| ཏུང་རྒྱལ་སྐུམ་མཚན་རྩལ་ལོ། | མ་སྐྱེས་པ་རྣམས་སྐྱིམ་གྱིས་ཅེག |
| チャンチュブ センチョク リンポ チェ マキエー パナム キューキュル チク | |
| སྐྱིམ་པ་ཉམས་པ་མེད་པ་ལྟེ། | གོང་ནས་གོང་དུ་འཕེལ་བར་ཤོག ། |
| キューバ ニヤムバ メーバ ヤン | コンネー コントウ ベルワル ショク |

チベット語での普回向

(文責 SZI事務局長 亀野哲也)

… 国内レポート③ …

平成21年度聖護寺国際公開安居報告

S Z I 事務局員 おお たに う い 大谷 有為 (東京都長泰寺副住職)

7月10日に、熊本県菊池市・聖護寺で、夏期40日間にわたり開催されている国際公開安居が解制をむかえた。

今年度の海外からの参加者は、ペルー4名、アルゼンチン2名、アメリカ1名(短期)で、南アメリカからの参加者が中心であった。

第1回目の国際公開安居が開催されてから、すでに18年という時間が経過している。しかし、何年の時を経ても、聖護寺に上山してくる安居参加者たちの修行に対する真摯な態度と、彼らを包む聖護寺の凜とした空気は全く変わらない。

海外では、なかなか実践することが難しい「行」を、この聖護寺で「清規」に則り、黙々と実践し、ただひたすらに坐る。このことこそ、国際公開安居設立の主旨の根本であり、故・檜崎一光老師の思いである。海外からの参加者のみならず、山内雲水全員、聖護寺に集う僧侶全員の気持ちも一糸乱れず、ここに集約される。

安居の最年少参加者は、ペルーからの21歳の男性であった。応量器の扱いに戸惑いながらも、日々のすべての行持

に真剣に取り組んでいた。

『典座教訓』の法益の最後に、「三心」の教えが説かれたとき、彼は何度も深く頷いていた。ペルーに確実に伝播する正伝の仏法を、まさしく全身で受容する彼の姿がそこにあった。



平成21年度聖護寺国際公開安居

… 国内レポート④ …

夏期大学講座開催報告

S Z I 事務局員 おお た けん こう 太田 賢孝 (東京都大龍寺副住職)

大本山永平寺主催夏期大学講座「禅といま」が、7月29日・30日に東京グランドホテルで開催されました。講師と講座タイトルは、高田明和先生(浜松医科大名誉教授)「脳は若返る」、南澤道人老師(大本山永平寺副貫首・北海道中央寺住職)「仏縁に生かされて」、木村清孝先生(鶴見大学学長)「仏教と現代—道元禅の位相」、小倉玄照老師(岡山成興寺住職)「良い子と悪さ子・諸悪莫作を読む」でありました。

本講座は道元禅師七百五十回大遠忌の際に、一般社会に向けた期間限定の文化事業として始まりました。ところが多くの受講者から継続を希望する声が寄せられ、「大遠忌後も続けられれば、10年を節目としてがんばろう!」と勢いづいたという経緯があります。そして今年が節目の10回目。学長の佐々木宏幹先生はじめ、誰もがこれまでの集大成と思って講座を運営していました。

蓋を開ければ、聴講者は330人の満席、キャンセル待ちが100名近くという状況となりました。初日の講師でもある副貫首老師を筆頭に、監院老師・東京別院監院老師から社会全体が抱く禅への関心の高さをご指摘いただき、都市

部において永平寺が文化講座を開くことの意義を示されました。来年以降も引き続き、このような学びの場をいただけることになりそうです。



中食の精進弁当



満席の会場

両大本山ワークショップアンケート報告 (抜粋)

總持寺修行僧

- 「宗教とは？」という誰しもが抱き、生涯を通じて答えを求めていく課題でした。現在本山において修行生活をしている我々だが、それ以前に一人の人間として結論を追っていき、又、宗教に密に関わる者としては、その結論をもって布教などの形で宗教の展開を行う必要性も現代社会では大切な課題となってくる。同時に、こういったことは前述したとおり、人生という長いスパンの中で真理を追究するものであると私は思っているので、今回の学科で人間の在り方や歴史、文化というとても長く長い時間をかけて積み重ね、今に至るものの多くの重要性や宗教それ自体の価値を再確認させていただく講演会であった。私の修行生活はまだまだ始まったばかりであるが、これから漠然とした「宗教」という人生の議題に取り組んでいきたいと思う。(愛知県 平成21年安居)
- 迫力がありません。話し方、身振り手振りに、存在感に、一番最初に話された「坊主は職業ではない」「坊主は生きる手だてではない」という言葉に心がふるえました。私は修行中ですが、「修行」というものに大変悩んでいます。何をもち修行とするのか？いかにすれば正しい修行ができるのか？環境なのか自分自身の心の持ちようなのか、修行することによっていったい何が得られるのか？なぜ自分の欠点ばかり見えるのか？老師のお言葉には力がありました。「宗教とは生活である」自分は今、当役やお経を覚えることなどで、大変なのですが、何故修行をしているのかという事については常に考えていこうと思っています。老師のお言葉の中から自分なりに理解できたものを、日々の中で少しずつでも実践していこうと思います。いつか自分も老師のような力を持った言葉を発することができるのかどうか。今は自分なりに修行を行います。今日は本当にありがとうございました。(静岡県 平成21年安居)
- 今日は大変有難い御講演を賜り、有難うございました。私は人は何故生きるのか、どうあるべきか、自分とは何かという問題に大変興味があり、日々生活しております。私にとって重要なのは坐禅という誰もがたどりつく最高の生き方という答えに納得するのではなく、釈尊や多くの先人達がそうしてきたように、その坐禅という答えにたどりつく最高の生き方という答えにたどりつく過程を学びたいのです。先生のお話を聞かせて頂き、いろんな事を見て、経験し、考え、感じてきたから、今の人生があるのだと思います。私も言われた事をただただのみにするのではなく、様々な事を経験し、考え、学び、感じとっていく中で、自分らしい生き方というのを探していきたいです。仏教の教えは難しく、まだ理解できない法が沢山ありますが、少しずつ吸収していきたいです。(秋田県 平成21年安居)
- 質問時間の時、還暦を過ぎ、これからどう生きて行けばいいのかと質問している人がいて、その質問に青山俊董老師が答えていました。自分も何か答えがないかと考えていましたが、見つかりませんでした。僧侶として生きていく上で、人々の迷いに答えてあげることができないといけないと思います。今はまだ僧侶として修行を始めたばかりですが「遇一行 修一行」という言葉を忘れず、頑張っていきたいと思いました。とてもいい講演でありました。ありがとうございました。(福島県 平成21年安居)
- 總持寺で修行させて頂いている中で、法要の差定を覚えたり、進退を覚えたりする。これは、住職を務めるにあたって必要不可欠なものであると思う。しかし、法要だけこなせる僧では、先生のおっしゃられたように職業の僧になりかねない。もちろんそれも重要な仕事ではあるが、本来の僧の一番の役割は釈尊の明らかにされた真如を伝えていく事だとあらためて気付かされました。僧侶として、そのの所をしっかり認識して修行に励みたい。(茨城県 平成21年安居)
- 今回の講演会の中で「宗教は生活である」というようにおっしゃっていましたが、まさにその通りであると感じました。というよりも生活そのものが宗教であり、修行そのものであると思います。しかしそれは自分の中に確かな自己を確立していかなければ意味がないもので、宗教の為に生活があると考えてしまっは間違いになってしまうと思います。宗教の為に生きるのではなく、あくまでも自分の生活の中に

宗教があり、それが修行となっていくので、大切なのは、まさに“自分の命は自分で生きていく”ということであると思いました。現代社会には新興宗教が増え、それにすがり、宗教の為に自分を犠牲にしてしまう人々が多くなってきています。このような時代だからこそ、まずは何にもふりまわされない確かな自己を持ち、自己を律していくことが大切であると感じました。(秋田県 平成21年安居)

- よき生き方とは、教え(仏法など)を学び、教えを伝えていくことだということがわかった。亡くなった人への最高の供養とは、その人の願いを受け継いでいくことも学んだ。切り口の違いで争わないためには、謙虚に生きていくことが大切だと感じた。また切り口の違いは、必要があって生まれたものなので、その違いを尊重し合って学びあうことが大切だということも学んだ。仏教の「全てが兄弟で、一つの命」という考え方が重要なものであり、人は謙虚に尊重しあい学びあって生きていくものだと思った。(埼玉県 平成21年安居)
- 本日の講義を聞いて、一番心に残った言葉は、“一行に遇いて、一行に修す”であった。修行というのは今を生きる、これからの為ではなく、命の事であると言っていた。お坊さんは職業ではないという言葉にも心をうたれた。私の考えでは坊さんは一種の職業として考えていたからである。私もこの機会に、もう少し自分の在り方、お坊さんとしてこれから何をすべきなのかを考えていきたい。(福井県 平成21年安居)
- 自分は僧侶の息子として生まれ育ちました。青山老師は「坊主は職業じゃない」とおっしゃっていましたが自分の父は職業として僧侶をやって自分を育ててくれました。僧侶を職業としてとらえると様々な問題があると思います。しかし現実には檀家さんのお布施を頂いて僧侶として生活しています。自分は父の職業としてのお坊さんの姿しか見ないでこの總持寺に安居しています。僧侶を職業ではなく、宗教家としてとらえられるような安居にしたいと、青山老師の講演を聞いて思いました。(群馬県 平成21年安居)
- 印象に残っているのはタクシーの運転手との話でのことで、僧として、職業としてやるのか、それとも修行僧として宗教家として生きていくのかということ。私は本山に修行に来て、後者の生き方をするつもりですが、周りをみると前者として、資格を取るために来ていると思える者がほとんどだと感じていて、修行とは何なのだろうと日々悩んでいます。もちろん職業としても生きてはいますが、青山老師のように、生活するために僧として生きるのではなく、僧侶として、新到の今の気持ちを忘れずに生きていこうと思いました。(神奈川県 平成21年安居)
- 青山老師が最初、演壇にお立ちになられて、お話を始めた時、その真剣な目付きに引き込まれました。そして、坊主は生きていく手立てではないとおっしゃった時、今までどこかで坊主というのは職業だと思っていた自分は、考え直すべきだと感じました。仏教が伝えられ中国・日本と伝わってきて今もなおその教えが生きているということは、とても有難いことだと思います。私はこの仏法を少しでもいいから体得し、人々に伝えていくべきだと感じました。切り口について青山老師は、人は切り口しか見ることができない。だから、少々意見の違いがあってもそこで自分の正しさを主張し、争ってはいけないということをおっしゃっていました。また、切り口の違いは必要があって生まれたもので、それは、各人の生まれ育った環境と、各人の歴史の違いから生まれたものであるとおっしゃっていました。それならば、価値観の違いで別に腹を立てる必要はないのだと感じました。人は、自分の思いを満足させようと常に行動しますが、そればかりを追い求めるのではなく、他人の意見、思いも尊重する精神が必要だと感じました。思いやりの心で行動し続ける、これが大事だと切に感じました。難しいですが、この心を忘れずに生活したいです。合掌。(静岡県 平成21年安居)
- 今回の講演内容は胸に響く話が多くもありました。その一つは、まず「生老病死」についての事です。還暦を迎え、2度目の人生を歩む時、「生」よりも「老病死」と向き合う時間が増えるかもしれない、ならば、「老化」を「老花」に変えていく必要があるというものでした。「生老病死」については以前単頭老師の学科でも老師がお話して下さり、その時は「生老病死」の受け入れ方について学びました。私自身、

体の健康状態が現在あまり良くないという問題があり、けがや手術を何度も受けるたび、(なぜ自分が?なぜこのようなハンデ、痛手を負わなければならないのか?)という強い思いがありました。さらに「死」についても幼い頃に父が亡くなり、深く深く落ち込んだ時期もありました。しかし、上山するまでの様々な経験により、(ああ自分はこれで良いのだ。いくつもの大きなけがや深く悲しい父の死を経験し、それと正面から向き合った結果が今の自分を生かしてくれているのだ。)と感じ、それらを受け入れる事ができました。上山後も入院など、困難と言えものも相変わらず自分の身に起こりますが、現在では怪我により満足に座れないこと、入院により同安居のみんなに比べ遅れをとってしまったことが逆に「仏法を深く学びたい」という意識へと強く向かわせてくれています。ただ「生老病死」の本来の意味を本当に自分が理解しているか分からないので、安居中の学科や、それ以外の時間にも学ぶ時間を作り、今後も「生老病死」を見つめ受け入れていく必要があると感じました。もう一つ、単頭老師の学科の内容とつながりを感じたのは「不生不滅」というものでした。「一輪の花(すみれ)の為に地球は回る」そんな事を今まで自分は考え付きもしませんでした。このことは単頭老師の「我々は大きな力によって生かされている」という言葉とどこかつながりを感じました。一輪の花の為に、「水は歌う川を流れながら」という言葉もあるようで、水は海、雲、雪、水と姿を変え、その命を繰り返しているんだという事も学ぶことができました。しかし、今回の講演のテーマである「真理は一つ」という事を私は見出すことが出来ませんでした。「切り口の違いで争わぬ」という事については、ガンジーも「宗教は山のようなもの」と表しており、入り口、登る道は違っても辿り着く場所の一つである。としているので、その事についてはなんとなくですが、理解しているつもりです。私は今回の講演の中で「真理は一つ」というテーマの答え「〇〇〇だから真理は一つ」というものは「本来の面目」の中にあるのではないかと感じましたが、それは間違っているのでしょうか?ありのままの姿、自然の物をそのまま受け入れられる心が直心、真理というものにつながっていくのでしょうか?そして真理に辿り着くまでに至らなくても、今後その一部に気づいた時、私は僧侶として何をしていくべきなのでしょう?私は上山するまで、同安居の者たちとそのようなものを求め、修行させて頂くのを心待ちにしておりました。しかし、現在までそのような雰囲気は残念ながらほとんど感じられません。同安居の様々な面を見ていくなかで、自分の「求める心」も間違っているのではないかと思う時もあります。が、今回の講演の中でもお話「参学眼力のおよぶばかりを見取会取るなり」という言葉のように、これからも謙虚な心を忘れず、修行に励んでいこうと感じさせて頂き大変感謝しております。最後に私は「もっと早く父の代わりに僧侶になれば良かった。」と反省する日々を送っていたのですが、「先に亡くなった者の代わりには生きられない。先に亡くなった者の分まで生きる」という言葉を頂き、何か胸にひっかかっていたものが取れた気がしました。これからは父の分も家族、檀家の方々、お世話になった全ての人たちの為、修行に励んでいき、今後の人生を歩んでいこうと、改めて感じさせて頂いた私にとって大切な講義でありました。将来私が老い、生老病死を体験していくなかで、たくましく「老花」し、自分自身の中に「蓮」の花を咲かせていけるよう、これからも泥にまみれ学び生きていきます。本日はありがとうございました。(静岡県 平成21年安居)

●自分が今まで、いかに狭い視野で物事をみていたことを思い知らされました。正直、安下処で「修行をさせていただきに参りました」と言って上山したものの、自分にとっての修行とは何なのか、また、それはここ總持寺でないとできないことなのかなどといった疑問を持ちつつも、答えを見出せず、その術も全く見えなまま、ただ一日一日を過ごしてしまっていました。今回の講演を聞き、多少はそのヒントになりそうかなとのことで、今後の修行生活が変わっていきそうな気がしています。今日の講演では、その機会を与えてくれたことに感謝しております。今回会報で初めて読ませて頂きましたが、「禪」の海外活動の広さに驚きました。今まで、国内での活動しか知らず、また、それも自分の身近な地域で、正に今回の講演のテーマのような一つの切り口でしか物事を見ることができていませんでした。と、同時に、少し海外での活動に多少興味を持ち始めました。現在はここ總持寺で修行させて頂いておりますが、機会があれば一度海外の禪を体験できたらなと思っております。自分の禪と海外での禪、同じ禪でも学ぶ場所が違えば、それは全く別物。だからといって、どちらかを切り捨てるのではなく、どちらの禪も吸収し、新たな視点が見出せたらどれだけ素

晴らしいことか、考えるだけで胸の高鳴りを感じます。昨日までの自分では至らなかったことを思い、気づいたのは自分ですが、気づきかけを与えてくれたこの講演、そして青山俊董老師に御礼申し上げます。合掌(静岡県 平成21年安居)

- 宗教とは何であるか、曹洞宗の僧侶としてこの問いに対する自分の答えを見つけなければならないが、青山俊董老師はこの講演会の中で宗教者としての自覚を私達に促し、宗教の在り方を考える機会を与えてくれた。2500年もの間、様々な宗派に分化したものの、釈尊の教え、基本教理は今日まで伝えられてきた。日本では信仰する宗教をもたない人が増加しているが、それでも多くの人が亡くなれば仏教の様式で葬られる。お経は誰の為に読むものか、誰の為に葬式をやるのか、のちに残された者とのように関わっていくかが僧侶として大切なことだと改めて感じた。風土の違いや人種の違いで二つの宗教が対立することがあっても、お互いの宗教を尊重し、学びあうことで解決に向かうはずである。まずはお互いの宗教を「知る」ことが大切だとこの講演で学んだ。宗教者になるにあたって、ただの職業としての宗教者ではなくて実践を積み重ね、経験から得た真理を伝えられるように、これから日々精進していきたい。(福岡県 平成21年安居)
- 「宗教とは」まずタクシーの話が印象的でした。「坊主やってるんですか?」職業として考えるのか宗教家として考えるのか、在来出身の私としてはその点をいつも考えるところでもあります。青山先生はお父様の死がきっかけで出家され、大学にも10年以上在籍しやはり「住職」より「僧侶」なんだと思います。その点は僕はこれからのテーマだと思います。あとはこの地球上の歴史上で仏教は2500年、キリスト教は2000年、イスラム教は1400～1500年、何十億と続く、この地球上の歴史の中では一瞬さらに人の一生は本当に瞬きほどの一瞬。先生はその時間なまけるからとって常に僧堂で修行僧と過ごす。なかなか真似できません。最後の還暦を過ぎてどう生きていいかわかりません」という質問の答えの「遇一行、修一行」すごく考えさせられる言葉で、私も今後そういった質問や、困っている方をきちんと導いていけるよう、しっかりとここ總持寺で修行に励んでいきたいと思っております。(熊本県 平成21年安居)
- 青山老師の熱の入ったお話は、実際にご自身が外国で体験されたことと老師の仏教観が調和され、大変聞きやすく、またとても興味深いものでした。近年、海外でも坐禅などを通じて仏教も知られはじめてきたことだろうとは思いますが、そこに至るまでの先達の方々の苦勞は計り知れないものだったと思えます。これから私達は坐禅だけではなく、坐禅を通じてもっと外国の方に仏教について知ってもらえるような努力が必要だと感じました。機会があれば『GATE』を見てみたいですね。(愛媛県 平成21年安居)
- 愛知県の尼僧堂に知人が体験で安居したことがあり、事前に多少の情報がありましたので青山老師のお話は興味深くお聞きすることができました。テーマに沿ったお話の切り口、展開が素晴らしいので、お話が次々と頭の中に飛びこんで参ります。「真理は一つ。」身にしみました。特に「全部の切り口が正しい」という言葉は、今、そしてこれからも忘れないであろう印象深いものであります。それぞれにそれぞれの正義がある。頭で理解し、理屈として分かってはいても、なかなか実践できないことでもあります。しかし、今回のお話の中で、「切り口は必要があつてうまれたもの、学びあい、尊重し合つて生きていこう」という『これからいかにあるべきか』というご提示により、改めて目が覚めた思いであります。今後の修行生活—おそらく一生続きますが—において、一つの指針として心に留めておくべきこととして、大切に心の中にしまっておきたいものであります。大変感謝しております。ありがとうございました。(福岡県 平成21年安居)
- 今回の講演は青山老師もおっしゃっていましたが、我々僧侶に向けて話されているということが感じられた。老師のおっしゃっていたように間違っていることなどないのだと思っていたが、難しく感じつつ聞いていた。「法」とはどういうものなのか、「仏法」とは「仏教とは仏道とは」という話を聞いて、これまで聴いた解説の中で一番分かりやすく、納得して聞くことができた。今日の講演を聞いて、自分がこの修行生活を見出したと考えている「現代における僧侶の在り方」について何かを見つけられる気がしたか、やはり難しく何も分からず終わってしまった。質疑応答の時に泣きだしてしまうほど悩み、相談している方がいらした。私はあの方のように真剣に話を聞いていなかったの、そのことを後悔しています。(山形県 平成21年安居)
- 「老・病・死を見ずえて人生を深める」という言葉が印象に残りました

た。それでいて「生」に対して積極的な青山老師はすばらしく感じました。インドやヨーロッパでも活動を行うなど、その活動範囲の広さにも驚きました。インターナショナルというだけあって、青山老師の布教活動に感心いたしました。また、内容が難しく感じる点があつたかありましたが、自分で勉強して講演会にのぞめばより深く理解でき、さらに興味深く聞けるかと思つた。また、老師の「このままではだらけてしまう」と自分で自らを律して修行するという姿勢は学ばなければいけないと思つた。何故自分は今修行しているのか、その考えが分からなくなってきた私自身、今もう一度考えなおし、意識を高く持って生活していこうと思つた。(山形県 平成21年安居)

- “宗教は職業ではない、生命のあり方を見つけることである” 青山先生のこの言葉に、強く共感いたしました。今年の1月に、自分の友人の母親が亡くなりました。その友人とは5歳のころから親しくしており、僕の母親とも家族のように接していた仲であります。身内以外の者で、初めて親しい人の死に立合いました。普段は強気な友人が私の目の前でぼろぼろ涙を流す姿を見て、私の目からも涙があふれてきました。その時法要を行ったのが私の父であつたのですが、法要中、法要後、友人がしきりに父にお礼を言い続けます。それで私は人が人に別れを告げることの大切さ、また、それを行う者のあるべき姿について考えさせられました。これらは進退を覚え、お経さえ覚えれば誰でも行つていい事ではないのだ。だからこそ私達は今までの日常を離れ、こうした修行を行っているのだ。これを決して職業としてではなく、人の生き方を探す道としてとらえていきたいと思つた。また、新しい事も学びました。“切り口の違ひは必要性があつて生まれたもの。尊重し合ひ、学び合ひ” 正月に神社に行き、クリスマスを祝う、日本人はなんと器用な人種だと考えていましたが、自分の宗教しか見ることができず、他を排他的に扱うより、はるかに人間的であると思つた。文化の違ひも“違ひ”ことを大切にできるように努めていきたいと思つた。(山梨県 平成21年安居)

永平寺修行僧

- 今まで聴きたかつたのは今日みたいな話で、求めていたのが今日みたいな語り口だつたと思う。押しつけるか、自分の話を延々と語るか、何も訴えかけないか、今までの講演の印象はそんなものばかりだと思つた。こういう人がいるんだと安心した。(山梨県 平成18年安居)
- たいへん勉強させていただきました。尼僧さんのお話(講演)を聴いたのはおそらく初めてだと思つたのですが、表現の仕方や話し方がまた比丘とは違ふなと思つた。茶道や華道をやられているからか、日本人独特の言葉の表現や言い回しを大事にしている方でした。女性・男性と区別するわけではないですが、見方・視点の少し違つた話が今思えば聞けた気がします。「安心」は条件付き、「大丈夫」は条件付き。そうではなくお釈迦様の教えからははずれないから「安心」「大丈夫」これが言えるのはデカイぞと。仏戒をいただいて、戒のもとしっかりと本気で生きている人にしかいえない言葉だと思つた。(新潟県 平成18年安居)
- “大勢は要らない。本気の一人から始めようじゃないか。” 開口一番のこの言葉に、まずガツンとやられました。仏教・仏法・仏道という馴染みの言葉を皮切りに“法”という字の展開、水が高きから低きに流れるということは、時空を超えた真理だ、自然の約束なんだというお話がありました。また、“古”という字は十代伝わつたものは、本物であるということでした。2500年伝わつた仏教は、作曲家であるシャカや道元禪師が発見した曲であり、経文は生演奏する為の楽譜であるというお話もありました。私は尼僧さんらしい丸みのあるあたたかい表現だと思つた。更に、床にふす患者さんに“病んでも大丈夫、死んでも大丈夫”“おシャカ様のレールから外れることはない。”という誠の安心の話が、印象的でした。(静岡県 平成18年安居)
- 手術前の患者に、大丈夫と書いた石を渡した内容がとても印象的でした。助かっても大丈夫、死んでも大丈夫、どうせ行く所は仏の場所なのだから。とても納得しました。私もそのぐらい言えるような僧侶になれるよう精進していきたいと思つた。並びに青山俊董老師、執筆翻訳され欧米などで出版されているが、やはり日本語でしか表わすことができない言葉などがある、それだけ日本語はすばらしいと思つた。(埼玉県 平成21年安居)
- とてもいい話を聞きました。もっとゆっくり聞きたかつたです。女性の

感覚で言葉や季節、仏法に対する考え、とても美しく思つた。同時に、自分が今持っている感覚・考え方の小ささや軽さに気付かされました。人として男として、僧侶みならいとして、もっと大きく広く深く感じたり考えたりしたいと思つた。今の修行の間は毎日忙しく、公務に追われその様な時間はなかなか作れませんが、帰つたら、これからの人生ゆっくりじっくり感じ考えたいです。答えは一つかもしれませんが、沢山の切り口と、それを尊重して生きていけたらと思つた。また話を聞きたいです。大丈夫と言える様になりたいです。(群馬県 平成20年安居)

- 最近の日本の曹洞宗は法要などでただお経だけを唱えて終わつてしまうことが増えてきていると聞いて切ない気持ちになつた。肝心な説法や仏法こそ多々しなくてはいけないのではないかとおっしゃつていましたが、その通りだと思つた。坊さんが仏教を皆の者に広めない限り、広まることはないのだと感じた。これからの曹洞宗の教えや「禪」を広めるには、自ら行動し、見本・手本を見せないといけない。つまり、坊さんとは普通の生活から人に教えられるような生活をしなければいけないのだと感じた。その生活をして、ようやく説法が出来るのだと感じました。(新潟県 平成20年安居)
- 今回の講演会では、地元に戻つてから周りの人に伝えたいことをたくさん聞くことができた。まず、本気の人一人始めれば、誰かがついて来てくれる、という事だ。一人から始めよう。その言葉が強く残つた。仏教とは、人がつくつたものなのか、という事に対する答えにも、とても深いものを感じた。人が作つたものなら、時間的・地理的制約からぬけ出すことができない。そうではなく仏教とは、ずっとそこにあつたのだ。それを、お釈迦さまが見つけ出したのだ。気づかなくてもあつたもの、それにお釈迦さまが気づいたという事である。その教えは、縁起や四聖諦などである。2500年もの間、今まで引き継がれてきたもの、それは本物である。その事についても考えさせられた。お経のあり方についてのお話を聞く事ができた。「お経とは、音楽で例えらるなら楽譜である」という話が分かりやすかつた。作曲家であるシャカが説いた教えが楽譜である。その楽譜は分からない人が見れば何を書いていても意味のないものかもしれない。しかし、それは生演奏になる事によって、感動をあたえるのだ。つまり、伝える人がしっかりと伝えれば、それはものすごく強い力となつて人に影響をあたえるのである。この事を聞いた時、説法の大切さを強く感じた。せつかく、今ここにある仏教という教えを、私達仏教者、お坊さんがみんなに分かりやすく伝えなければいけないのである。これはとても大切な事であると感じた。これに関係して、お経とは亡くなった人に読むものなのか、というお話を聞いた。仏の教えとは生き方の教えであるのだ。生・老・病・死などから人生を深める。だから、お経は本当は生きている人のためのものであるのだ。その事について、今の日本でおこなわれているお経は、亡くなった人のために読まれているだけでなく、その残された家族の方にも向けられているものなのだという事を気づくことができた。この世の中で真理は一つ、その切り口が違ひだけで仏教キリスト教イスラム教などがある。その違ひを尊重してこそ、真に覚るという事ができるのだと感じた。(秋田県 平成21年安居)
- 最後の迎りに「宗教の垢ではなく本質をみなければならない。方便の御利益信仰に留まつていて、宗教の根本であるどちらへ転んでも大丈夫、という安心立命の境地へ導くことができなければ、新興宗教の醜態と全く変わりが無いのだ。このところをよく押さえておいてほしい」という説示に、深く共感を覚えました。宗教の本質を見究めて、本質の上に確りと腰を据えた坐禅をしていけたら、より格好のよい僧侶として生きられるのではないかと、という事を、講師・青山老師の姿勢から学ぶことができたと思つた。(秋田県 平成20年安居)
- 今回、愛知専門尼僧堂堂長の青山俊董老師のお話を聞かせて頂き、大変感銘を受けました。宗教とは生き方であり、職業ではない、この世界に最初から存在していた天地悠久の真理。その真理に、釈尊や道元禪師は気づいただけである。その真理を私達は今、永平寺で修行という形で実践しているのだと思つた。「私達は釈尊や道元禪師を目指すのではない。釈尊や道元禪師が目指したのを目指す」という言葉が印象的でした。古という言葉の深さや。私達仏教者がどうあるべきかと、最初から最後までとても分かりやすく、とても濃く、良いお話を聞かせて頂き勉強になりました。(岐阜県 平成19年安居)
- 今日S Z I講演の青山俊董老師のお話を聞いて、2つ程、特に印象に残りました。最初にタクシーの運転手さんが、お寺の息子であつたという事には驚きましたが、お坊さんの嫌な面を見て家を出たという理

由に少し思い当たる事が自分にもあった事を思い出しました。私の家もお寺という事で、小さいときからお寺関係の人々に色々出会い、携わってきました。師匠である父に、幼少から家を継ぐ様に言われ続けており、その為にお坊さんになるのが嫌になった事がありました。色々なお坊さんとの話を聞いたり話をしたりして、これが本当にお坊さんの会話か? そんな事していいのか? と疑問を抱く事や時には嫌悪感さえ持ちました。そんな事もあり、少なからずタクシーの運転手さんの気持ちはなんとなくですが理解出来ました。しかし、一番身近にいる父の事を周りの人たちに聞いたりすると、私が歳をとるにつれて、父のしている事の大きさ、困難さ等を理解し、父の様なお坊さんになりたいと思いました。その為、青山老師とは違う見方ですが、この人が周りにもっとお手本となる人がいれば変わっていたのではと思いました。次に、戒名のお話ですが、話の中でもあった様に、戒名を理解されない事が多いと父も嘆いていました。特に、戒名を死後に受け取る者だと勘違いされている方が多いと言っていました。青山老師がお話されていた通り、時間がある際に、檀家さんとお話をする等の説明の機会が必要だと思いました。(大阪府 平成21年安居)

●本日の講演会を聞いて私は大変共感を得るものがありました。私は代々お寺の家系ではなく、いわゆる在家のものであります。まだ永平寺に上山する前に、お寺のお手伝いをさせていただいていると、よく聞かれるのが「よくお坊さんになろうと決心されましたね」「どこかのお坊さんの住職さんになられるんでしょうね」という質問でありました。私にとってお坊さんとは、決して決心してなることでもお寺の住職になることでもなく、生き方、人生の歩み方だと思います。確かにそれなりの覚悟をもって出家することや寺の住職として社会に出ることも大切ですが、その前に一人の僧であり一人の人間であると思います。本日の講演で「お坊さんは職業ではない、生き方である」という言葉を聞いて、私は内心ホッといたしました。お坊さんはお坊さんになることが重要なわけではありません。お坊さんになってからどういう生き方をするかが重要なのである。本日の講演会で私は自信を持ってお坊さんという生き方をさせていただいていると思ひ、実践に臨めることができます。私の人生にとって大変重要な話を聞かせていただきました。ありがとうございました。(山形県 平成21年安居)

●私は雲水でありながら僧侶であるということや、修行をするということが一体何の為のものなのかかわからず悩んでいます。「何か目的や目標があって何かをする」というのが当然だった生活から「漠然としたものの為に全力で努力をする生活」に切り替えができないまま二カ月以上経過してしまいました。ただ、本日の青山老師の「坊主は職業ではない。生き方だ。」というお言葉で少し進むべき方向というかひっかかっていた何かが外れた様な気がしました。「人が人として生きる上で何を考え何をすべきなのか?」そんな疑問に答えられるように日々精進し、一人でも多くの人の役に立てる僧侶になりたいと思ひました。時代が変化し荒廃した時に人々が必要とするのは「水」と「標」であるとかの書物で読んだことがあります。今ならその意味が分かるような気がします。決して良いとは言えない現代、必要とされているのは「答」ではなく「標」ではないかと思ひます。人の考え方をそのまま受け入れるのではなく、その考え方を参考に自分なりの「答」を出して前に進んでいく。その手助けをすべき立場なのが我々僧侶の役目であり使命ではないかと思ひます。きっと僧侶はゴールや答えや正解というのはないのだと思ひますが、私がこの世に別れを告げる時に後悔しないように日々を過ごしていきたいと思ひます。本日はありがとうございました。(三重県 平成21年安居)

●実体験や具体例をたくさん付けて下さり「宗教」について分かりやすく、且つ去年から修行を始めた新参者にとって心にグサッと刺さる課題をいくつも頂いた。私が常日頃抱えている疑問の一つに現在の「葬式仏教」というものがある。本当の仏教・仏道とは何か、生きている人に対する仏教・お寺のあり方は何か、たとえば余命3カ月の人に本当に自殺をしたい人に、人を殺したい人に、仏教は必要なのか否か、宗教の力は必要か否か、どうやってアプローチするのか悩みは尽きませんが、説くだけ、法要をするだけではダメで、故宮崎禪師の言葉でいうと「仏教を仏道する」ことが大切であると講演を聞いて思った。常に自分に、今に疑問をもって修行していきたい。接茶寮に配役させて頂いているが、お泊りの御寺院さんの振舞い方、言葉づかい、部屋の使い方などを見ても現在の御寺院のお仏教の伝承者・布教者として宗教家として疑問を抱くことが多い。これを自分におとしこんで仏教の髓・粋を見つめていきたい。貴重なお時間ありがとうございました。(京都

府 平成20年安居)

●青山俊董老師の講演を拝聴して、お経に対する捉え方が変わった気がします。お経というのは死んだ人に読むものか、それとも自分の足元に読むものかということに対して、青山老師は自分の足下に読むものだと答えており、これを答えられなければ僧侶ではないとおっしゃっており、大変納得させられました。私たちは一日に何度もお経を唱えています。そのお経は誰のための何のためのものなのかを考えてはいません。また、青山老師はお経は楽譜、そのお経の教えを説いた釈尊や道元は作曲家とたとえ、それを実践するのが生演奏だと音楽にそれぞれ当てはめて分かりやすく説明して下さいました。楽譜つまりお経というのはそれだけでは全く意味の分からないものであるが、生演奏という形で実践に移すことで意味を成すというのは、今後の私の僧侶としての人生の中で大変役に立つ考え方だと思います。(北海道 平成21年安居)

●昨日のお話の中で「大丈夫」というお話が一番心に残っている。病氣等で心が病んでいる人が「私は大丈夫なんでしょうか」と尋ねられた。尋ねられたその人は大丈夫と書いた物をそっと渡した。すると「その大丈夫はあなたの気まぐれな気持ちに大丈夫ではなく、病んでも大丈夫、死んでも大丈夫。御仏様が強いて下さったルールからは外れないので大丈夫(青山さん)心が病んでいる人にこれだけの言葉を中々言えるものではないです。しかし、心配で心配で、嘘でもいいから誰かに大丈夫だと言ってもらい、安心を求めている人にとって、この言葉は安心をもたらすのではないかと思う。さらに、生き続けられるのかということに大丈夫ではなく、死んでも大丈夫と仰って、決して嘘の大丈夫になることは無く、死んでも大丈夫ということで、死というものを正面から受け止められる気持ちになるのではないかと思う。(大阪府 平成21年安居)

●今回、青山老師のお話を聴講する事が出来、本当に良かったです。自分自身でも「お坊さん」である事に誇りを感じておりましたが、老師のように「生活の糧ではなく最高・最後の姿」と言い切った事に感動しました。誇りに思う事はあっても「最高・最後の姿。生活の糧ではない。」という事にはまだ行き着いていない自分に、まだ甘い考えがある事を思い知らされました。そのように思う良いきっかけを与えて頂きまして本当にありがとうございました。できることなら再度聴講させて頂きたいです。(秋田県 平成19年安居)

●とても興味のある話題で話に聞き入ってしまいました。「一人の賢者が国がおこる」すごく力のある言葉で新鮮というかすごく重みのある言葉に聞こえました。青山俊董老師の言葉一つ一つがとても力強く、重みのあるものに感じました。それは、青山老師御本人も仰っていましたが、「人の最終的な有り方を求めて行き着いたのが坊主」その姿勢が真剣でその時その時を必死に生き抜いているからそれが言葉に出てくるのだと感じました。また、自分は一人の僧侶としてアカにまみれる様な僧侶にはなりたくないと感じました。(北海道 平成19年安居)

●「物差しが違うのだから見方は違う」「自分の短い物差しでしか測れない」この二つの言葉、わかってはいてもなかなか実践するのは難しく、いつもアカのついた見方で対応してしまいます。青山老師の講話は、いつも自分が考えているがうまくできない悩みをまた考えさせてもらえる話でした。「違いを学びあい、学びあっていこう」という言葉で互いの理解についてお話されていましたが、私はいつも自分が我慢してしまう人なのですが、それでは疲れるだけなのです。だからといって横柄な態度では互いの理解にはなりにくく、ほんとうに悩むばかりです。そんな私ですが、青山老師のお話を聞いて一つ、そうなのかもしれないと行き着いた答えが「潔さ」です。自分にはない「潔さ」が青山老師の話にはあったと思ひます。その答えを見つけた時間を頂けたことを心から感謝する思いであります。(兵庫県 平成21年安居)

●一番印象に残ったのは「あんしん」と「あんじん」というところです。明日に手術を受ける人、検査結果の出る人に悪い事になっても仏のルールに沿っているのだから大丈夫だよ、と言えますか? という問いに何も言葉がありませんでした。私はまず言えないでしょう。私は精神的に弱く、どこかに保険を作って「あんしん」を得ていました。青山老師の言う様に、その保険はいつもすぐに崩れ去りました。どうなってもよいというところまで入り込むことで、そこで得られる「あんじん」自分なりに考えてみようと思ひます。また、2500年続いてきた仏教、最近「垢」が多いのではとの言葉は考えさせられます。どのような僧になるべきか、どうすれば慕われる僧に成り得るか、考えた時、

總持寺 一般聴講者

私の答えは青山老師が言うところの「垢」を持たぬということですが、この「垢」を捨て切ることが私には容易ではないでしょう。ブツダの言うところの汚道沙門なのでしょう。この「垢」を捨て、人々に慕われる僧になれるよう、日々精進しなければならないと感じました。(北海道 平成21年安居)

●本日の青山俊董先生の言葉の多くから気づきを頂きました。私達の仏法は、師資間で命をかけて伝えられ今日に至るということ、すべての事物は何もないところから生まれたのではなく、天地悠久の真理もともあるものを発見しているのだということ(古道発見)。私などは、つい自分本位になりがちであり、自分が一番であると、自分で何か生み出すことばかり考えがちであって、未来や過去をかえりみないし、仏教の根本というものが未だに解っていないのだらうと感じました。霊的でよくわからないものと思っていた仏教は実はごくありふれた地に足のついたような宗教であることも判りました。慈恩大師の三車和尚の話にもあったように、自分も、良かったこと、悪かったり後ろめたいこと、すべてをもって永平寺の安居をはじめました。これらの法執は捨てなければならない。私の師寮寺でも、教えにしたがって真面目にやれば仏さまのレールからはずれることはないとよく言ってもらっていますし、自分でもそう感じることもあるので、今回改めてその話を聞き、永平寺や将来の不安より一歩抜け出した気がしました。しかし、すべて捨てることができるか、一生自分は変わらずこのままであるような気がしてしまいます。近年、キリスト教においても禅を取り入れられていると聞いたことがあります。見方を変えれば一部でも他宗派で共感できる場所はあると思います。切り口を変えて、視野をひろげる。そして、私も本気の一人に入れたらいいなと思います。また、青山俊董先生の声、言葉づかいに感動しました。ありがとうございました。(愛知県 平成21年安居)

●「お坊さんは職業ではない」自分自身そう考えていますが、やはりどこかでお金のことを考えることも事実です。ある人に「お坊さんは生き方です。」と言われて、お坊さんに対する考え方が変わった事をよく覚えています。しかし、それも時間とともに少しずつ考え方や思いが変化しています。基本的に考えるの変化は物を考えているということなので良いと思いますが、やはり最初に抱いた新鮮で、正直な気持ちをなくさないようにしたいです。それを継続させる心を、この修行で養いたいです。(北海道 平成21年安居)

●海外への普及活動がこのような形で行われているとは全く知らず、純粹に興味をもちました。だれもが階級の差別なく、また禅の思想に打ち込める環境を提供し広めていくことは、発展途上国等においてこれから必要性を高めていくのだと思います。貧富の差が拡大するにつれ、利益追求にこだわらず、社会貢献していきたいという若者は、私の周りにも最近多くなってきたように思います。私も海外への曹洞宗の精神の普及を通じて、困っている人を助ける活動にいつか参加したいと思っています。まずは安居生活をしっかりと終え、その後にSZIの活動をもっとよく調べていきますので、よろしく願いいたします。(山梨県 平成21年安居)

●本日の講演をきいて、老師の積極的な布教活動や実践活動が、老師の生きがいだと感じました。今は永平寺にこもって、外の世界を見ることはできませんが、「禅」の精神が今回の講演やパンフレットを見て、世界各地に伝わって浸透していることがわかりました。時代や地域をこえて伝えられていくものに魅力を感じ、禅や仏教、宗教が不思議に感じられ、目には見えないすごい力があると実感されました。是非また講演をきいてみたいです。(愛知県 平成21年安居)

●お話の中で、真理についての話がありましたが、例えとして太陽が出ることがありました。山に住む人、海に住む人によって太陽が出て沈む位置が違うということで、自分のものさしは短いと思うことが大切だということでした。このように自分のものさしによって同じものでもよくも悪くもみえるということはあることなので、とても大事なことだと思いました。ただ、真理とは何かと考えると山に住む人にとっては山から太陽が昇り、山に沈むということが真理なのだと思います。真理というものは何なのか。真理は一つだけではないのかも思います。また、話の中で経済的な豊かさは仏法とは相反するという話がありましたが、これはとても印象深いものでした。私は、日本で僧侶としてやっていくものとして、どうしていけばよいのか、どのような姿勢で仏教を実践していけばよいのか、考えていきたいと思っています。今回の講演会は、色々なことを考えさせられました。ありがとうございました。(長野県 平成21年安居)

●久しぶりに厳しい、そして愛情深いお話を聴けてありがたく思います。まさしく修行僧の方に向けてですが、私も日々日常生活を修行ととらえています。近ごろ、やわらかい知識としての法話が多い中で今回老師のお話は力強く心強く、支えとなりました。いかにあるか……「アンジン」となるように、さらに行じていきます。お会いでき、お話を聴けて、ありがたかったです。すばらしく行じられている老師に近づけるように……。 (東京都)

●本日、青山俊董先生に初めてお目に掛かり、お話を伺い、仏教の本質を分かり易くしていただき、終始息をのむ間もないくらい内容のあるものでした。今日、お聞きして良かったと感じております。私事ですが、禅に関心をもち出家して、僧侶として修行させていただきたくも思ったこともありましたが、今の生活を続けていく事としていますが、真実を実感して、般若心経に謳っているように生きていきたいと存じます。ですが中々、安易に時間を過ごしてしまい残念に思うことばかりです。在家中、もっと本質に沿った人間になる為に、もっと良い方法はありますか？本日はありがとうございました。(東京都)

●『道元禪師に学ぶ人生』を購入し、毎日読んでおります。まして講演を聞けましたこと、本当に嬉しく思っております。私はまだ40代ですが、リストラ等で自分ではどうしようもなくなり坐禅会に来るようになりました。本山に来ることで気持ちもやわらぐようになり、今日まで生きております。法話等で、今精一杯生きる・生かされている、と言われていますが。講演の感想にはなっていないませんが、本当に曹洞宗の“檀家”で良かったと思います。(神奈川県)

●友人に青山老師の著書を借りて読んだことがあります。先月、来山したときに講演会の案内を入手しました。直接お話しを聞く縁のあったことに感謝します。「真理はひとつ、切り口は色々。まず自分なりの切り口しか見えないことを知る(全体を想像できない)。切り口の違いを学びあおう。」演題の意味が深く理解できました。青山俊董老師に厳しさと若さを感じました。黒衣の方を主体に話したということが最後のやりとりでわかりました。(東京都)

●残り少ない人生ですが、毎日反省の繰り返しです。日々の出来事に正しい行動をしていると思っていても、後で考えると出来事を一つの方向から見ているかなと反省させられます。今日の老師のお話を参考にいたしまして、様々な考え方ができるように勉強し行動したく思います。(神奈川県)

●宗教は法(真理)が根本であることがよく理解できました。日の出と日没のお話は愉快でした。僧俗を問わず、多くの方々にしっかりと聴いてもらいたい講演でした。(神奈川県)

●青山俊董老師の講演は永平寺の夏期大学講座で二度ほど拝聴しましたが、その度に勇気と希望を与えられ感動したのを覚えています。本日のお話は少し難しく、わかりにくい面もありましたが、宗教とは何か、どういうものか、おぼろげながらわかったような気がしました。講演録を見直して、再び講演の内容を確かめたいと思います。すばらしいお話をありがとうございました。(東京都)

●「法」の意味、よくわかりました。感動、共感、教訓がありました。よく分かりやすい口調で説得力がありました。男の仏教講師が多い中、尼僧として頑張っておられる。今後とも、広くご指導願います。(神奈川県)

●長い長い間の憧れでした。勿論、若い頃からお名前や御本やテレビなどでお話はうかがっていましたが、62歳になってこういう御縁をいただけたことにまず感謝です。私も10代末から20代、坐禅・お茶道(表千家)と通いは致しましたがいつのまにか仕事・日常に流され60歳を過ぎてしまいました。両方とも故東野金瑛老師・故小野宗静師匠というすばらしい師につきながら40年経って初心にもどっています。そういう折に青山先生にこの總持寺でお目にかかれる御縁いただけたのも故花田正道老師や、昔門前で足袋小僧をしていた父の引きあわせもあるのでしょうか。妹と拝聴できたのも嬉しいことでした。毅然とした御老師様のこの時間をいつまでも心に生かし続けたいと思っております。厳しいご法講でした。深謝申し上げます。どうぞまた、お導きの御縁を与えられますように。合掌。(山梨県)

アンケートのご協力ありがとうございました。頂いたアンケートの全文はホームページ(<http://soto-zen.net>)でご覧いただけます。

会費納入者・賛助金納入者名簿 2009年4月1日～2009年7月31日まで

ありがとうございました。
大切にさせていただきます。

■ 会費納入者ご芳名 2009/4/1～2009/7/31 (順不同・敬称略)

北海道 長福寺 長尾龍心
北海道 中央寺
北海道 明光寺 川村寿光
北海道 法徳寺 伊藤禪龍
青森県 大乗寺
岩手県 東海寺
岩手県 清雲院
岩手県 大慈寺 大矢慈光
岩手県 長福寺
宮城県 東北福祉大学
宮城県 寿昌院 山田宗雄
宮城県 洞雲寺 千田幹雄
宮城県 秀麗齋 堀内久幸
宮城県 輪工寺
宮城県 城国寺 菅原英州
宮城県 大満寺 西山廣宣
宮城県 洞林寺 吉田俊英
宮城県 玄光庵
宮城県 秀林寺
秋田県 月宗寺 袴田俊英
秋田県 乗福寺 中泉俊堯
秋田県 補陀寺 大山陽堂
秋田県 永泉寺 寿松木宏毅
秋田県 自性院 鈴木道雄
秋田県 大川寺 榎方宜之
秋田県 天竜寺 八島国雄
秋田県 松庵寺 渡辺崇山
秋田県 歡喜寺 堀口良允
山形県 宗任寺 蓮池泰乘
山形県 輪王寺 長谷川俊英
山形県 清林寺 佐藤孝子
山形県 宝泉寺 渡辺禪悦
福島県 佛母寺 采川道昭
福島県 長泉寺 石月聰明
福島県 長照寺 楠俊道
福島県 昌源寺 立花純孝
福島県 安禪寺 高山正勝
福島県 円通寺 吉岡棟憲
福島県 石雲寺内 葉貫成徳
福島県 天徳寺 細川正善
福島県 安穩寺 黒金義範
福島県 昌建寺 秋央文
福島県 五十嵐ビル内 福島BS観光
福島県 雲月寺
茨城県 龍泉院 北条正興
茨城県 鏡徳寺 牛久保真一
茨城県 乾徳寺 山田栄一
栃木県 光真寺 黒田俊雄
栃木県 高德寺 渡辺清徳
群馬県 東善寺 村上泰賢
群馬県 羽仁素信
群馬県 南オモロ 山口淳一
群馬県 宗泉寺 柴山輝行
群馬県 桂昌寺
群馬県 林昌院
埼玉県 集福寺 松本文雄
埼玉県 龍泉寺 柿沼仁法

埼玉県 建福寺
埼玉県 東光寺
埼玉県 普濟寺
埼玉県 広徳院
埼玉県 興禪寺
埼玉県 長青寺
埼玉県 昌福寺
埼玉県 宗福寺
埼玉県 円通寺
千葉県 永興寺
千葉県 真光寺
千葉県 宗胤寺
千葉県 満蔵寺
東京都 大恩寺
東京都 東長寺
東京都 岩井院
東京都 善徳寺
東京都 石夢工房
東京都 龍沢寺
東京都 宗清寺
東京都 宗参寺
東京都 法清寺
東京都 信松院
東京都 保善寺
東京都 観泉寺
東京都 祥雲寺
東京都 福壽院
東京都 堀口良允
東京都 蓮池泰乘
東京都 長谷川俊英
東京都 東照寺
東京都 俊朝寺
東京都 玉宗寺
東京都 喜連寺
東京都 全昌院
東京都 増福寺
東京都 松月院
東京都 大泉寺
東京都 高西寺
東京都 蓮生寺
東京都 天桂寺
神奈川県 梅宗寺
神奈川県 東泉寺
神奈川県 貞昌院内
神奈川県 成願寺
神奈川県 曹源寺
神奈川県 西福寺
神奈川県 東林寺
神奈川県 宝泉寺
神奈川県 佛心寺
神奈川県 金木文雄
神奈川県 盛徳寺
神奈川県 永明寺

安野正樹 大場満洋
植野 晃
岡部雅明
高橋秀雄
武田秀嗣
引間維一
荒井禮一
井上智晴
小泉悟道
高木正尊
児玉重夫
森田英仁
佐藤信嗣
岡本信之
土田由美子
志茂有山
佐藤昭次郎
飯島尚之
西沢宏道
奈良康明
西村和裕
上村映雄
田中法生
西沢広人
助川尚子
野口弘龍
長谷川 連
垣内善勝
宇田照彦
統道雄
磯貝昌隆
青木尚子
安達良元
長岡俊成
仲井章史
田中良昭
久保井賢丈
関俊二
大藪美美子
館盛寛行
亀野哲也
橋本大心
西海秀晃
瀧田光久
金木文雄
石田征史

尖秀雄
松野宗純
程木昭徳
中野東禪
岩本英男
梅田良光
榎真英
横山敏明
堂保雄
友宮黎友
田宮隆児
佐藤慈真

■ 賛助金納入者ご芳名 2009/4/1～2009/7/31 (順不同・敬称略)

北海道 中央寺
岩手県 大慈寺
宮城県 秀麗齋
宮城県 輪王寺
宮城県 紫昌院内
宮城県 秀林寺
宮城県 補陀寺
秋田市 大川寺
福島県 長照寺
福島県 雲月寺
茨城県 鏡徳寺
茨城県 龍泉院
群馬県 群馬寺
埼玉県 群馬寺
埼玉県 補陀寺
埼玉県 普濟寺
東京都 法清寺
東京都 高西寺
東京都 中外日报社
東京都 吉田光次
東京都 長谷川 連
東京都 宇田照彦
東京都 東照寺
東京都 西福寺
神奈川県 西海秀晃
神奈川県 尖秀雄
神奈川県 程木昭徳
神奈川県 館定道
神奈川県 堀内久子
神奈川県 小笠原隆元
神奈川県 鈴木包一
神奈川県 青山俊童
神奈川県 藤田一法
神奈川県 宮田春光
神奈川県 一心寺
京都府 宗仙寺
京都府 正誓寺
京都府 宝泉寺
京都府 昭台寺
京都府 青眼寺
山形県 大蔵寺
山形県 成願寺
山形県 龍宝寺
山形県 浄心寺
山形県 正翁寺
山形県 盛徳寺
山形県 吉祥院
山形県 慶林寺
山形県 大蔵寺
山形県 全龍寺
山形県 廣沢寺
山形県 林聖院
山形県 慈眼院
山形県 大慈悲院
山形県 愛知門陀堂
山形県 長松院
山形県 春江院
山形県 一心寺
山形県 宗仙寺
山形県 正誓寺
山形県 宝泉寺
山形県 昭台寺
山形県 青眼寺

北海道 山田宗雄
宮城県 秀林寺
宮城県 秀麗齋
宮城県 大川寺
秋田県 乗福寺
山形県 輪王寺
福島県 安禪寺
福島県 佛母寺
福島県 雲月寺
福島県 長泉寺
福島県 昌建寺
茨城県 鏡徳寺
茨城県 龍泉院
茨城県 乾徳寺
群馬県 鳳仙寺
群馬県 林昌院
群馬県 円福寺
埼玉県 建福寺
埼玉県 興禪寺
埼玉県 普濟寺
埼玉県 円通寺
東京都 永興寺
東京都 龍沢寺
東京都 宗清寺
東京都 宗参寺
東京都 法清寺
東京都 信松院
東京都 保善寺
東京都 観泉寺
東京都 祥雲寺
東京都 福壽院
東京都 堀口良允
東京都 蓮池泰乘
東京都 長谷川俊英
東京都 東照寺
東京都 俊朝寺
東京都 玉宗寺
東京都 喜連寺
東京都 全昌院
東京都 増福寺
東京都 松月院
東京都 大泉寺
東京都 高西寺
東京都 蓮生寺
東京都 天桂寺
神奈川県 梅宗寺
神奈川県 東泉寺
神奈川県 貞昌院内
神奈川県 成願寺
神奈川県 曹源寺
神奈川県 西福寺
神奈川県 東林寺
神奈川県 宝泉寺
神奈川県 佛心寺
神奈川県 金木文雄
神奈川県 盛徳寺
神奈川県 永明寺

■ 塔婆供養で植林支援協賛者ご芳名 2009/4/1～2009/7/31 (順不同・敬称略)

累計 167件 苗木 47,970本分

動 静 報 告

2009年4月1日～2009年7月31日まで

4月16日 会報編集会議 檀信徒会館
5月13日 正力松太郎賞授賞式 檀信徒会館
5月18日 会報発送作業 事務局
6月2日 大本山總持寺講演会 總持寺
6月3日 大本山永平寺講演会 永平寺
6月10日 キャンドルナイト in 大船観音 大船観音寺
6月15～20日 モンゴル植林ツアー モンゴル国
7月2～8日 聖護寺国際公開安居通訳 聖護寺
7月19日 孟蘭盆会合同法要 檀信徒会館
7月19・20日 会報編集会議 檀信徒会館・事務局
7月28日 伝道史編集会議 檀信徒会館
7月29・30日 夏期大学講座運営協力 檀信徒会館
インターネットにて随時役員会を開催しています。



編 集 後 記

アジア、ハワイ、南アメリカ、ヨーロッパと国境を越えて活動している曹洞宗の僧侶や信者の方々の様子を報告することができました。仏縁の力の大きさを改めて実感しました。
館盛寛行

SZI ホームページ運営中

SZI 検索

会報バックナンバー、過去の総会・講演会、スタッフページなどもご覧いただけます。

URL <http://soto-zen.net>